

サトシとナルト～永遠
なる友情～

雷神 テンペスタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある1人の少年は、老人のために働くために生きていくこと決めていた、だがある者達の訪問より、

それはかなわなくなったが自分は、独りではない事を思い知らされた少年はこの者達と生きて行くこと決めたのであった、少年の名は【うずまきナルト】訪問者達の名は、【サトシ】【シゲル】【カスミ】【ハルカ】【ヒカリ】【ミク】【タケシ】という……今ここより友情物語が始まるのである。

前に書いたサトシとヒロイン異世界物語を再編集してもう一度投稿します。

目次

設定	1
プロローグ	
第1話 トリップ先は忍びの世界!!??	12
第2話 火影とナルトとの会話	19
第3話 ナルトとヒルゼンを守る……	
二匹の狐、3匹の猫、2匹の犬	28
第1章 サトナル奮闘記	
第4話 原作の序曲……	39
第5話 認めるか認められるか……	
第6話 木の葉丸との接触……九尾を封印されしナルトの真相……	49
第7話 班決め決定! 第7班、第8班、第10班! 波乱な7班の自己紹介?	61
第8話 演習(前編) 2人の少女の友情	81
第9話 演習(後編) 決着の演習	102
第10話 サクラに教えられる明かされし真実!	114
第2章 波の国の勇者	135

第11話 波の国編開幕！だが、序章な
り！ | 142

第12話 いざ、波の国へ！ちよつとい
ざござあり、新たな展開が!?! | 149

第13話 新たな展開！畑カカシは、
逆行者?! | 160

第14話 桃地再不斬と決闘！ | 165

第15話 サトシとナルトとカスミ達の
真実 | 178

設定

サトシ

第一の主人公

マサラタウンで相棒のピカチュウ、カスミ、ハルカ、ヒカリ、タケシ、シゲルとミクと一緒に旅に出る途中だった、だが仲間達と共に大きな穴に落ちて気が付いたらNARUTO（それもスレナル）の世界に居た

あと、サトシはジャンプの本を特にナルトを読んでるっていう設定後に暗部に入る

所属 『木の葉の守護七神』副隊長、暗部総副隊長

性質変化は風遁、火遁、水遁、土遁、雷遁のすべてが性質変化

術

影分身 ナルトから一番に教えてもらった

変わり身の術

螺旋丸 修行中にエロ仙人（自来也）がふらっとやって来て教えてもらった

風遁・螺旋手裏劍 漫画を覚えていたのでナルトに内緒で独学取得だが三代目にはバ
レていた

風遁・螺旋丸

風遁・風塵の術 アスマ先生に教えてもらった

風遁・烈風掌

風遁・裂帛手裏劍 オリ術です

風遁・烈刃 風の剣で敵をぶった斬る

火遁・煉獄 オリ術でポケモンの技煉獄を真似ている

火遁・豪火球 暗部に居たイタチに教えてもらった（いつか五年間の話書きます番外

編ですが）

火遁・火龍炎弾 三代目から教えてもらった

火遁・豪炎の術

火遁・豪火滅却

火遁・豪龍火の術

千鳥 カカシに教えてもらったがカカシはサトシの正体を知らない

千鳥流し

雷遁影分身

雷遁・サンダーソード　オリ術です

雷遁・四柱しぼり

土遁・岩分身の術　土影オオノキから教えてもらった

土遁・有為転変

土遁・加重岩の術

土遁・超加重岩の術

土遁・軽重岩の術

土遁・超軽重岩の術

土遁・土流大河　三代目から教えてもらった

土遁・土龍弾

土遁・土流壁

水遁・水衝波水影から教えてもらった

水遁・水陣柱

水遁・水陣壁

水遁・水蓮火　オリ術

仙術

飛雷神の術

何故、五影（雷影以外）から教えてもらったというたとサトシ（とカスミ、ハルカ、ヒカリ、ミク）は火影に頼んで一年間だけ他の里に行つてその長から教えてもらった
それとサトシ（とカスミ、ハルカ、ヒカリ、ミク）は仙人モードも出来ちゃう
サトシ（とカスミ、ハルカ、ヒカリ、ミク）は六道仙人やペインと同じ例外中の例外である

サトシもアカデミーではドベ

ナルト（スレナル）

表 意外性No.1の忍び明るく元気なドベの少年。「だつてばよ」が口癖。

裏 暗殺戦術特殊部隊、通称暗部に所属

冷静沈着、残酷卑劣、『木の葉の守護七神』隊長そして暗部の総隊長

最近は改善されている。

九尾との関係は良好で2歳の頃に和解

4歳で暗部に所属（1発OK）

6歳で総隊長就任

7歳でサトシ達と遭遇【家族の暖かさ】を知る

12歳原作をぶっ壊すために奮闘中（うちは事件や我愛羅 e t c ……）
忍術

サトシとほぼ一緒に九尾チャクラモード、はまだ使えない（尾獣の聖地に行っていないため）

（読者の方が言ってくれたので）後々に自来也から鍵を貰い、綱引きを行う予定。

カスミ

所属 零番隊 『木の葉の守護七神』

仮面は猫、暗部名は白夜

性質変化は水遁

術

影分身 ナルトから一番に教えてもらった

変わり身の術

医療忍術（全て）

水遁の全てを取得している

仙術

飛雷神の術

カスミは水影以上の水遁使いへと変貌を遂げた

口寄せ サトシと一緒にガマ

ハルカ

所属 零番隊 『木の葉の守護七神』

仮面は猫、暗部名は春風

性質変化は火遁

術

影分身 ナルトから一番に教えてもらった

変化の術

幻術（全ての幻術を独学で習った初代火影と二代目火影の幻術・黒暗行の術は何故かハルカだけに見えていた初代と二代目の幽霊が可愛いという理由でハルカに教えた）

火遁全ての術取得している

仙術（全て）

口寄せ ガマ
飛雷神の術

ヒカリ

所属 零番隊 『木の葉の守護七神』

仮面は猫、暗部名は光月

性質変化は風遁

術

影分身 ナルトから一番に教えてもらった

変化の術

風遁全ての術取得している（がテマリの術は取得していない）

仙術（全て）

飛雷神の術

口寄せ ガマ

ミク

所属 零番隊 『木の葉の守護七神』

仮面は狐、暗部名は黒狐

性質変化（全て）

術

サトシと同じ

幻術（全て）

仙術（全て）

飛雷神の術

タケシ

所属零番隊 『木の葉の守護七神』

仮面は犬、暗部名は磐

性質変化 土遁

術

土遁（全て）

幻術（全て）

シゲル

所属零番隊『木の葉の七神』

仮面は犬、暗部名は貌蓮

性質変化 風遁

術

風遁（全て）

飛雷神の術

あとドベ役はナルトの他にサトシ、カスミ、ハルカ、ヒカリ、ミクとなっており

第七班は上記のカスミとサスケ、サクラでナルトとサトシはサクラの事が好きな振りをしていてナルトが（友達感覚で）好きな人は上記の4人です。

サトシは少しはよくなったがまだまだ鈍感

だが気になつてるのが上記の4人です

それとタケシ、シゲルはちよつと空気状態だけど、

波の国編の初期頃に帰つてくる。

それと他にサトシ達の正体やナルトの素を知つてるのは猪鹿蝶の一族とうちは一族、日向一族、油女一族の6一族であり、奈良一族のシカマル、山中一族のいの、秋道一族のチョウジは知つてるが、うちは一族ではあるがサスケは知らない、サスケはそれを知る前にイタチがあ的事件を起こしたため知らない：

うちは一族は、表面上は滅んだことになつてているが本当は滅んでいなく、木の葉の死の森の深い所で生きている……サスケのあればサトシが頼んで、写輪眼が出来る者総動員でサスケにあの事件を見せただけで本当は滅んでいない、サスケの親はサスケを騙すことは嫌と断固反対していたが、サトシやナルトの説得で泣く泣く承諾した、うちは一族を生かしておく理由は、後に起こるであろう、第4次忍界対戦で貸玉として三代目がサトシから聞いた話を元にイタチ含む、うちは一族に話し、うちは一族を許すことによりうちは一族の信用を取り戻し、この作戦に応じたのだ。

そして、猪鹿蝶の3人組についてですが、サトナル奮闘記での、矛盾点を改訂しました。

知っているのにも関わらず、何故か、知らないような感じだったので。

いのに關しては、ナルトとサトシが好きという設定です（第7話では思いつきり、シカマルとの会話でモロバレですが）スレナルっていえば、いのはナルトとくつついてるので、この小説でも、スレナルいのがあります。

他の小説と一緒に幼少期に猪鹿蝶の3人はナルトはあっています。（サトシ達と会った後）

ポケモン達がなぜ、いつの間にか消えていたのは、5年の間に修行に出るといい、中忍試験編の前に戻ってくる予定

プロローグ

第1話 トリップ先は忍びの世界!! ??

マサラタウン・・・オーキド研究所

サ「まさか、ミクが生きてたとはな？またあいつ事だから俺に黙っててって言ってたんだろ？」

オ「ああ、あやつのお茶目っ気にはもうついて行きそうにないわい、ミクもついていくのじゃろう？」

サ「ああ!!？久々って事もあるしさ!!？」

オ「そうかの…」

サ「うん!!？じゃあ行くな！」

オ「サトシ、少しあやつらを連れて行って欲しいんじゃないよ？」

サ「え？ああうん!!？いいよ？誰ですか？」

オ「こやつらじゃ」

サ「オーキド博士……わかりました、みんな戻ってくれ！」

オ「頼んだぞ？ 其奴らと冒険するのも久しぶりじゃろ？」

サ「うん!!？ じゃあ行くな!!？」

オ「いい旅をの〜」

サ「了解!!？」

これがオーキド博士と最後の会話になろうとはこの頃のサトシは知らなかった……
トキワの森入口

「「「「「サトシ（くん）!!？ 遅い（かも）!!？」「「「「」

サ「ごめんごめん、ちよつとなじやあ、行くか!!」

「「「「「「嗚呼／うん!!」「「「「」

サ「最初はトキワから行くか……？ って足元が見え……」

サトシは、突然空いた穴に落ちていき、それを見たカスミは――

カ「――!!？」

とつさの事でサトシの手を掴み――

ハ「カスミ!!？ 私も!!？」

ヒ「ハルカ!!？ あたしも!!？」

ミ「ヒカリ!!？ うちも!!？」

シ「ミック!!? 僕も!!? タケシ!!? 早く!!?」
タ「あつ、ああ!」

これでサトシ達一行は不思議な穴に落ちたのだった、サトシ達が消えたその森は異常な静けさだった――

—————
どこかの森

サ「……んあ? ここは? みんな!!? どこだ!!?」

カ「ここよ!!? みんな無事だから安心して?」

「[[[[うん]]]]」

サ「ふう……あつ!!? ピカチュウ? ピカチュウ!!? 無事か?」

ピ「うん、大丈夫だよ!!?」

サ「ふう、良かった」

カ「サトシ、ここ何処かしら? トキワの森にしては、暗す「誰だ…? お前ら……」ひッ

誰?」

「お前ら……何処の忍だ?」

「[[[[忍? つて忍者の事?]]]]」

「ああ、そうだ、ここじゃなんだ。付いて来い。」

「「「「「はい？あつ、はい」」」」」」

「じゃあ・・・行くぞ」

木の葉隠れ 火影亭

「「「「ハアハア、疲れた」」」」

サ「そうか？」

シ「僕はちよつとだけ疲れたよ」

ミ「えゝそうかな？」

カ「サトシとミクが体力馬鹿なだけよハアハア」

「入るぞ、じつちゃん」

「おう、珍しいの、お主がドアから入ってくるとわのゝ」

「白々しいぞじつちゃん、知ってんだろ？」

「ああ、まあな」

サ「あのゝ？」

「おおつ、すまぬの、してお前達は何者じゃ？」

サ「あつ、俺はサトシです。こっちは相棒のピカチュウです」

カ「カスミです」

ハ「ハルカです」

ヒ「ヒカリです」

タ「タケシです」

シ「シゲルです」

ミ「ミクです」

「わしは猿飛ヒルゼンじゃ」

サ「えっ?まさか、火影って事ですか?」

ヒル「うむ、いかにもそうじゃが?」

サ「そうか、火影様……実は俺はあなたの事知ってるんです。いやそこにいる暗部の正体もね?」

「なっ!?!」

ヒル「どういう事じゃ?何故、知っておるんじや?」

サ「実は、この世界は書物として語ってるんです。」

ヒル「では、その暗部の名前はなんじや?」

ナ「じい!!?!」「ナルト……ですよね?」!!?!」

ヒル「どうやらホントのようじやな?」

ナ「ああ……ならその本とやらの俺はどうなんだ?」

サ「……ナルトは意外性No.1ドベ明るく元気で口癖にだつてばよ、春野サクラ好

きで何にも考えないただのバカかな？」

ナ「もろに表の俺じゃんか」

サ「ナルトは、今何歳なんだ？」「6歳だ」じゃあ、それは変化の術か？」

ナ「そこまでわかるのかよ」ぼんっ

サ「あれ？何で俺と同じ背なんだ？」

ナ「は？何言ってるんだよ？お前らどう見ても、俺と同じ年だろ？」

サ「いやいや俺10歳だぜんなわけねーだろ！！??」

カ「あたしもよ！！??」

ハ「私もかも！！??」

ヒ「私もよ！！??」

タ「俺も15だぞ!!」

シ「僕は10歳だよ!!」

ミ「私もピチピチの10歳だよ！！??」

ナ「いやいや、ほら見ろ」

ナルトは大きな鏡↑何処から持ってきたよ？

「「「「「そんな—————!!!」」」」」

6人の少年少女の声が火影邸に木霊したのであった

続
く

第2話 火影とナルトとの会話

火影邸の部屋・・・

ナ「何だよ？お前らって年が違うのか？」

「「「「違う!!」」」」

ナ「そっか、何か問題があったのかもな？ここに来るに当たって」

カ「そうかもね？ってそうじゃなくて!!？私は、10歳なのよ!!？」

サ「永遠のって言わなくて良いのか？」

メタ発言してんの!!??

ミ「違うと思うよ？」

ですよね？

ナ「お前等2人って付き」「「「「違う!!」」」」「「「「そうか」

サ「は？何て言いたかったんだ？」

「「「「あんたは気にしなくて良いの!!」」」」

サ「あつ、ハイ!!？」

ナ「お前って尻に敷かれるタイプか？」

サ「は？」

ナ「は？ってお前、こいつ等がお前の事どういう気持ちで見てるのか知ってるのか？」

サ「そりゃあ、仲間だろ？」

ナ「…………お前らも大変だな？」

「「「「「ぐ／／／」」」」」

ミ「私は、サトシとキスしたよ？まあ、不可抗力という名のキスだけどね？」

サ「あれは！本当に倒れたら、お前が前に居たんだろ!？」

ナ「お前等2人って？」

「幼馴染（夫婦）」

サ「ってミク!?何言ってるんだよ!？」

「……………」

ミ「冗談よ？」

ナ「何かお前が言うのと冗談に聞こえないんだが？」

ミ「え？もうじゃあナルトも好きになってやろうか!!？」

ナ「俺に、そういうのは必要ねー」

ミ「なんで…だって「ミク」サトシ…」

サ「お前は人の事信じてねーな？」

ナ「そうだよ、俺は「火影しか信じないってか?!」!?そこまで知ってるのか」

サ「嗚呼、あつ火影様「なんじゃ?」シカマルは暗部に入ってますか？」

火「入って居らぬが？」

サ「此処はシカマルが入ってない設定か」

ナ「何で奈良の小僧なんだよ？」

サ「シカマルはナルトの数少ない信じる人の一人、何だよ」

ナ「奈良の小僧は信じてもらう気もねえし、それに俺はじつちゃん以外信じねえ、従わねえ事にしてんだよ」

タ「俺達は信じてくれないのか、俺らはお前の出生など色々な事を知っているそれでも信じてくれないのか？」

ナ「信じてねーよ、その事についてはいいと思ってるだが、会って間もない奴らを信じるわけにはいかねー」

サ「俺らは今すぐにでも信じて欲しいって言ってるんじゃないんだ、時間をかけていから俺たちを信じて欲しい。」

ナ「チツ…:わーったよ、お前らどこにすむんだ？」

「『『『『ナルトのアパート』』』』」

ナ「はあ!!何だよ!!お前らは知ってるはずだろう!!?俺のアパートには!!?」

サ「この里の人から石や色々投げられてんだろ?」

ナ「そうだよ!!それなのに、何で俺のアパート何だよ!!?それに俺と仲良しになったら……」

カ「知ってるよ?ナルトと仲良しになったら、里人から暴力や罵倒されるんでしょ?そんなの百も承知よ?表のナルトはドベと思われてるからね?」

ハ「私たちが守るのよ?」

ミ「そうよ、私たちが……サトシが貴方を守ってやるって言ってるんだよ?」

ナ「何だよ?サトシが守るって」

ミ「サトシもね?シゲルに会う前にねいじめに遭ってたのよ」

ナ「なっ!!?そうなのか?」

サ「ああ、そうなんだ、だからな、ナルトの気持ち分かるんだ」

火「そんな境遇があつたとはな?」

ナ「……確かにのだが、まだ信じるわけにはいかねえ」

カ「ふふっ……まだ……でしょ?」

ナ「う?（。 ㇀。） そうだよ、まだまだ」

サ「そうか」

—————

ヒル「サトシよ「何ですか？」サトシの世界は何が居るんじや？」

ナ「そうだよ？」

サ「やつぱり、火影様にはわかるんですね？こつちの世界にはな？ポケットモンスター、略してポケモンってのが居るんだ」

ヒル「そのポケモンって何じや？」

サ「ああっ！そうですね？じやあ、みんな出て来ーい！！」

ぼんっ

リザ「久々のシャバはいいぜえ！！？」

フシ「リザ！！？シャバって言うな！！？」

ベイ「そうよ、アホリザ兄…」

リザ「う、了解…」

ブイ「リザ兄もこの二人だと形無しだな」

ワニ「ハハハハハ！！？全くだ！！？」

ナ「これがポケモン……喋れんだな？それにそのボールはなんだよ？」

サ「ああ！でも一部の人しか聞こえないだつて！これか？これはポケモンを入れるためのボール、モンスターボールだよ？」

ヒル「すごい……」

カ「じゃあ、私たちも」

皆はポケモンを出した

ナ「みんなも持ってたんだな？」

サ「ああつ！俺達の世界はな？トレーナー、ブリーダー、ポケモンウオッチャーや色々な仕事があるんだ」

ナ「なるほどな……すごいな、そっちの世界では、10歳で旅に出るんだろ？」

ヒル「こちらも、実質10歳で下忍になっておる者もおろうが」

ナ「それは、極一部（カカシやミナト等）だよじい!!？」

ヒル「じいと言うでない!!？さっきまで火影様と言つてたではないか!!？」

ナ「それはこいつ等がいたから方苦しくしたただだよ!!？」

サ「喧嘩すんなよ、めんどくせえー」

カ「あんたそれ、シカマルでしょ!!？」

サ「おつとおもわず言っちゃった♪」

カ「言っちゃったじゃないわよ。全く。じゃあ行きましようか？」

ナ「行ってくてどこに？」

カ「それはもちろんー」

「」「ナルトのアパート!!?」「」

ナ「結局かよ。じゃあ行くぞ。」

ナルト達は火影亭から去っていった。

1人残された火影様というと……………?

ヒル「ふう……………これでナルトも友人ができたらの……………」

と呟いていたが、その声は誰も聞いていなかったー

—————

ナルトのアパート

サ「うわあ、マジでNARUTOの世界へ来たんだな」

ナ「何でだ？」

サ「いや漫画ではさ!この辺冒頭くらいに出るからさ!」

ナ「そうか」

ナルト部屋……………

ナ「じゃあ、開けるぞ」

「「「「「ああ（ええ）」」」」」

ガチャ

サ「ナル、ちよつと待つてな？」「ナルつて何だよ？」「いいじゃんか？俺等が入つてから来てくれ」

ナ「あ、ああ？」

タツタツタ

サ「いいぞ!!」

ナ「ああ？」

ガチャ

「「「「「おかえり!!!」」」」」

ナ「!!!」

サ「ナル、返事は？」

ナ「た、ただいま」

カ「ふふつナルト可愛い!!（でも好きなのはサトシだけどね?）」

ハ「可愛い!!(サトシも可愛いけど、ナルトも可愛い!!)」

ヒ「ナルトは私たちが守るからね?(サトシには敵わないけど可愛い!!?)」

タ「どうだ?この挨拶のリレーは?」

シ「これが挨拶のリレーだよ?」

ミ「前のサトシに似てるわね?」

サ「それ、言うなよ?」

ナ「(これが挨拶のリレー?何だ?この胸の温かみは?)……いいな」

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

ナ「ああ!」

続く

第3話 ナルトとヒルゼンを守る……二匹の狐、3匹の猫、2匹の犬

side サトシ

俺たちがこの世界に来て一週間経った俺たちは別に何もやっていなかったそれで俺はナルに

サ「なあナル。」

ナ「あ？何だ？」

サ「俺もアカデミーに入って良いか？」

ナ「は!!??って何でだよ！」

サ「俺も此処に来て一週間経っただろ？こいつ等もな、ボールん中ずつと入ったばかりだから、忍ポケしてみようかなって思ってた。ナルトはガマを口寄せ出来るんだろ？それにいつ戻るかもわかんねーしき」

ナ「ああ、まあそうだな？エロ仙人知ってるだろう？2く3才位ん時にエロ仙人からなガマを口寄せ出来るようにしてもらったんだ」

サ「2く3才で？原作より早過ぎだろそれにもうエロ仙人出てんの？まあ、その方が

面白いしな!!?」

ナ「なあ、サトシっていつもこんな感じなのか?」

カ「まあ、そうね、いつもこんな感じだから、あたし達は一人では旅させられないのよね?」

サ「それを言うなって、でもさ? 忍者になるのは、俺の二番目の夢だったんだよ!!」

「そんなの初耳何だけど?」

ナ「?」番目は何なんだよ?」

「「「「「「「ポケモンマスターが一番の夢(だよ)(だ)(よ)!!」」」」」」

ナ「ポケモンマスター!?(・|・;?ポケモンマスターって何だ?」

サ「すべてのトレーナー、ブリーダー、ウォッチャーの頂点に立つ事だ、簡単に言えばすべてのトレーナーより強いって事だよ」

ナ「へへお前の世界ではそんな事何だな?」

サ「ナルの表の夢ではある、火影になると一緒だぜ?」

ナ「成る程な?」

サ「うん、で?アカデミーに入るとなると、じつちやんに言うんだろう?」

ナ「ああ、まあどうせ聞いているだろうな」

サ「だな? 結晶で見てるかもな、んじや行きますか?」

ナ「ああ!!?」

火影邸、火影の部屋

ヒル「良いじゃろう」

「つてまだ何も言つてねえよ（ないぜ）!?!」

ヒル「お主等の話は聞いておつた」

サ「やつぱ、聞いてたんですか?」

ヒル「うぬ」

ナ「ハア〜じゃあ、アカデミーに入るんだな?みんなもか?」

「!?!」

サ「カンクロウか?」

「!?!」

サ「だよね?あつ、じつちやん俺も暗部に入つて良い?」

「!?!何言つてんだ（おるんじゃ）!?!」

サ「いや〜入りたいなあつて思つてき?」

ヒル「……良いじゃろう」

ナ「なっじじい!!?いいのかよ!!?」

火「うぬ、それに人材が足りん今、その方がいいじゃろう」

ナ「まっ、じつちゃんが決めたことなら止めないけどよ」

「「「「じゃあ、ナルトが修行付けてね?」」」」

ナ「俺かよ!!??もつといいのがいんじやねーのか!!??」

ヒル「では、お前らも暗部に?」

ナ「聞けやああああ!!?クソじじいいいい!!?」

「「「「ええ(ああ)」」」」

ヒル「では、暗部名は何が良い」

ナ「あつ、一週間前に言うの忘れてたけどよ俺の暗部名は狐月だ」

サ「へえ、狐に月か?九尾の事知ってるんだ」

ナ「ああ、そうだな」

ヒル「では、何が良いか」

サ「じゃあ、白狐で仮面は狐で」

ヒル「ほう、仮面は狐か?なぜじゃ?」

サ「……狐はナルトの事や色々な意味でな?」

ヒル「そうかのくして、皆は?」

カ「あたしの暗部名は白夜で仮面は猫」

ハ「私の暗部名は春風で仮面は猫」

ヒ「私の暗部名は光月で仮面は猫」

タ「俺の暗部名は磐で仮面は犬」

シ「僕の暗部名は獏蓮で仮面は犬」

ミ「私は!!暗部名は黒狐で仮面は狐で!!」

サ「つてミクも狐にするのか!？」

ミ「うん!!」

ナ「お前は何でだ？」

ミ「……サトシと同じ理由」

ナ「そっか」

火「では、皆、お前らを暗部とする」

「「「「「御意」」」」」

火「では、ナルト此奴らの修行頼んだぞ」

ナ「御意」

サ「じゃあ、帰ろうぜ！」

「「「「「ええ（ああ）」」」」」

「「「「「」」」」」

ナルトのアパート

ナ「じゃあ、お前ら、俺の修行は厳しいからな？」

「「「「「「百も承知!!」」」」」」

ナ「じゃあ、死の森行くか」

「「「「「「ええ（ああ）」」」」」」

こうして俺たちは暗部となり、ナルトからの修行を受けることとなった

サトシ side out

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

それで修行を受けてから五年経ったえつ？何でいきなり五年経ただって？まあ、色々あって訳は聞かないでください

ナルトは暗闇を走っていたそれで黒い影を見つけた

ナ「ここに居たのか？」

「ああ、月は綺麗だなんて思ってたな？」

ナ「ハハハ：そうだなすっかりここに馴染んでんな？」

サトシ」

サ「ハハハ……まあ、ここに来てもう五年だぜ？ 馴染んたのが無理だよ、戻る手がかりも何もないしさ？」

ナ「まあ、そうだな」

それで1時間位経った

「ちよつとーサト!!？ ナル!!？ ここに居たの！」

いきなり大きな声が聞こえた振り返ってみると……

サ「ああ、何だごめんな？ 月が綺麗だなんて思ってたな？ お前みたいで」

「ちよつ!!？／＼いきなり何よ!!？」

サ「ハハハ……冗談だよ」

カスミ」

そこには、前より綺麗になったカスミがいた。

カ「冗談で言わないでよね？」

サ「五年経つてもお転婆娘なのは、変わんねえな？」

カ「って何言ってるの？帰るわよってナルはサトを探すために外でたんでしょ!!」

ナ「悪い、俺も月に見惚れてな？」

カ「あんた等2人は月が好きだからね？」

「ああ、まあな？」

ナルトのアパート

「「ただいま（〜）」」

「「遅い!!」」

「「めん」

ハ「もう遅いかも〜何してたの？」

カ「何時もの場所で月見てたのよ？」

ヒ「もう、いくら月が好きでも、1時間も見ないでよね!？」

サ「おい!!??子供みたいに扱うなよ!!??俺はもう精神では、15歳だぜ!!??」

ヒ「それもそうか、でも子供でしょ!!?表では!!?」

サ「表は、バカを演じてんだからしやあねーだろ？」

ヒ「それはそうだけど、まあいいか」

タ「サトシとナルトはいつもの如く月でも見ていたんだろ？」

シ「サートシ君、君はいつもいつもー」

……………わかったね」

サ「はい（ナルシーぐちぐちうるせーよ）」

ミ「ちよつと！ナル！何であんたまで月見てんのよ！私も「ミクは黙ってなさい!!」は

い（——；）」

サ「よし！原作開始まで後一年だな」

「「「ええ（ああ）」」」

ナ「何が起きるんだ？」

サ「言つて良いのかな？」

カ「良いんじゃない？ どうせ私たちが来た瞬間からもう違うでしょ？」

サ「そうだな」

ナ「んで？ どうなるんだ？」

サ「ミズキ先生居るよな？」「ああ」あいつがお前に禁書の巻物を奪うとアカデミーが卒業出来るつてもちかけるんだよ「へえ原作の俺は馬鹿だな？」そうだな？ お前の表の姿のお前だからな、頭の脳みそがパーなんだよ」

ナ「そこまで言うか？」

サ「いや、言いすぎたな……んで、続きだ本のお前は禁書の巻物を奪った、奪った後にお前は禁書の巻物の一部の影分身を覚えてた時にイルカ先生に見つかったその後ミズキが来た、それでイルカ先生が止めている最中にミズキはナルトに九尾の事を話したんだお前はもう知ってるんだろ？」

ナ「当たり前じゃねーか。2歳の頃に和解したんだからよ？」

【そうじゃ】

サ「そうだな。イルカ先生はお前を庇つてミズキの手裏剣に当たった死にはしな

かったけどな？それで、ナルトはイルカ先生を認めたんだけ」

ナ「そうか、それがオレが最初に認められたって事か？」

カ「うん、そうなんだよ」

ナ「そっか？それなら良いや」

サ「後その時にイルカ先生の額当てもらうぞ」

ナ「そっか、じゃあそっちでやるか」

サ「原作の通りに落ちるのか？」

ナ「ああ」

サ「まあ、その方が良いな。あと、これはじじいにも言っておいてくれ」

ナ「ほんととお前は、前までは火影様って言ってたじゃんか？」

サ「めんどくさくなっちゃってね？」

ナ「そうでっかい、じゃあ、寝ますか？」

「「「「ええ（ああ）」」」」」

続く

第1章 サトナル奮闘記

第4話 原作の序曲……

ある日の日差しが眩しい昼の時間6人の子供が歴代火影の顔岩に何やらしていた

「へん!!初代には鼻毛書いちやえつと」

「俺は二代目に色々書いちやえ!!」

「「お花書き書き!!」」

そんな時に怒鳴り声が……

「コラーーーーーー!!?!ナルト!!?サトシ!!カスミ!!ハルカ!!ヒカリ!!ミク!!顔岩に落書

きしてんじやない!!」

ナ「げっイルカ先生にみつかった!? 逃げるぞみんな!!? (これでいいのか?)」

サ「イルカ先生早っ!?! (ああ!)」

カ「いつあたし達が抜け出したの気づいたの!?! (さすが中忍ね、つまナルトやサトシには敵わないと思うけど)」

ハ「確かにかも (暗部の総隊長と副隊長と比べない比べない)」

ヒ「やつば、6人が消えるんだからわかるね (そうそう、比べたらイルカ先生が可哀想よ)」

ミ「ふふッそれもそうね (あんた達が一番失礼よ)」

「(きーせん)」

「待たんかー!!お前ら!!」

ナ「ふん!!待つてられつか!!」

サ「そうだよ!!バーカ!!」

「待つてー!!馬鹿ども!!!」

1時間たつてナルト達を捕まえて補習を受けさせている間イルカは火影と話していた

火「ほっほっほ、あやつらはげんきじやの」

イ「笑っている場合では無いですよ!!火影様!!あいつらは大事な歴代の顔岩に落書きしたんですよ!!それにあの6人はアカデミーの卒業試験を2回連続不合格なんですよ!」

火「それはそうだがの?」

イ「あいつらが心配ですよ」

火「そうかの、だがあやつらはー」

アカデミーのナルト達の教室

ナ「あく補習だり〜」

サ「まあ、そうだけどさく、我慢しろって明後日にあいつが出て来るんだからよ〜」

カ「そうよ〜って、素で喋らないって前にも言ったじゃない」

ハ「そうかも〜バレたらどうすんのよ?」

ナ「はあ、ついでよ〜」

カ「ついで片付けない!!」

ナ「うっ、わーたよ」

サ「ミック?それでお前は何してるのかな?」

ミ「えっ?何が?ただ、答えを見せてもら「見るな!!」え〜」

サ「え〜じゃねえし……ってあいっら来るぞ」

ガラガラ!!

サトシがミックにつっこんだその時、扉が空いた

「よく、まーたやらかしたんだろ?」

「もう、いくら、ドベのふりだからって、みんなでやることなの?」

「まあまあ、いのその方がいいと思ってるんだからいいんだよ」

入ってきたのは、シカマルといの、チョウジであった

サ「よつ、シカマル、いの、チョウウジ」

シ「いのも言つてたが、みんなでやるのはどうかと思うぞ?」

サ「その方が面白いと思つてな」

シ「(。D。.) ハア…お前の好奇心めんどくせー」

ナ「それは言つちやダメなのだよ。ワトソン君?」

シ「誰が、ワトソン君だ! 誰が!」

「お前」

シ「2人で言うな! 2人で!」

「(。ω<) テヘペロ」

シ「(。D。.) ウゼエエエ」

シカマルは、いじられていた。

シ「作文!?!」

い「サートシ!」

いのは、サトシに抱きついていた。

サ「うわつと、どうしたんだ?」

い「いやあ、何か久々会つたなあつて思つてね?」

サ「確かに、この所任務で忙しかったもんなあ、なあナル？」

ナ「ああ、じつちゃんももうちよい減らしてくれたっていいのにな。」

い「あらら〜wじゃあ私が癒してあげる〜！」

「あつ！おい！」

いのは、サトシとナルトを抱きしめたのであった

チ「もぐもぐ。ナルト、サトシお菓子あげる」

「サンキュ〜」

そして、チョウジにお菓子をもらうのであった。

ガラガラ!!

つぎに来たのは…

「チツドベが居たか…」

「ん？あつ!?!サスケ!!!（うちは一族の生き残りか）

（復讐に囚われてる時のサスケか）

誰がドベだー!!!」

サス「お前ら6人がだよ」

「俺らいいがカスミ、ハルカ、ヒカリ、ミクはドベじゃねえー!!!」

サス「ふん！知るか、言ってる、ウスラトンカチ。」

サスケはそそくさと座るのだった

ガラガラ!!

「おつはよーみんなー!!」

「はっ? 誰? お前?」

カ「こらこら (素になつてる)」

「何よナルト、サトシ!! 誰? お前つて!! ねえサス「誰だお前?」がーんうえーん!!」
今のはただの一般人のどブスの豚野郎です

ガラガラ!!

「おはよう」

「(来やがったな (春野) サクラ) あつサクラちゃん!! おはよう」

サク「サスケくーんおつはよーサトシとナルト邪魔どけそこは私が座るのよ!!」

サ「そんな〜 (つてここは最初つから俺らが座つてたじゃねえかちよつと可愛いからつて凶に乗つてんじゃねえよ)」

ナ「サクラちゃん〜 (は? ここは俺らが座つてたじゃねえか? こいつ4人には劣るが可愛いからつて調子乗つてんじゃねえよ)」

心の中では、毒づいてる二人だったが可愛いという言葉があるので怒ってるのは不明である

サク「うるさい!!バカナルト!!バカサトシ!!」

カ「あんたね、ここは最初つからサトシとナルトが座ってたじゃない、それともそんなのそのバカのお隣が良いのかしら?そのバカのどこが良いのかしらね?」

サク「な、何よ!!あんただってサス「そんなバカ興味ない」んな…さつきからずっと気になってたけど、なんでサスケ君をバカ呼ばわり「あんただってナルト達をバカ呼ばわりしてるじゃない?それで真似てみました」

サク「むつきー!!!もういいわ!!」

カ「自分が悪くなったら、逃げるって最悪ね」

サ「お前は鬼か?」コソコソ

ナ「マシンガントーク過ぎんだろ?」コソコソ

カ「何よ?あの子がわるいんでしょ?あんた達がドベ(のフリ)だからって邪魔どけてひどいじゃない?おまけに自己中だし」こそこそ

サ「この頃のサクラはまだサスケ一途のバカだったんだから仕方ねえだろ?って先生が来るぞ」コソコソ

「うん」

ガラガラ!!

イ「席に付けく……今日の授業は変化の術だ」

「「「「えくよりもよって変化の術く」」」」

イ「いいから並べ!!」

サス「ふん!!変化の術……」ぽん

イ「よし、次ナルト!!」

ナ「ふふーん俺さ俺さ新しい術編み出したんだあ」

イ「ほう、なんだ？」

ナ「やあ!!」ぽん!!「うっふーん♥?」

イ「ぶ、ぶふー……!!」鼻血ぶー

「「「「あんららく鼻血出しちゃった」」」」

イ「何だ!?その術は!!!」

ナ「名付けてお色気の術!!」

イ「変な術編み出すなあ!!」

ナ「はい」

そんなこんなで今日の一日は終了したのだった

この日の夜に火影邸に6人の暗部が揃っていた

ナ「じつちゃん、任務は？」

ヒル「今の所はシゲル、タケシが向かった長期間任務が終わらんとないのだ」
サ「えくないの？」

カ「あんたね、まあいいか今日は休みって事ですか？」

ヒ「そうよね、任務ないからそうよね？」

ハ「ここんどこ暇すぎて、体訛つちやうのよね？」

ミ「あたしも暇過ぎる」

ヒル「そうかの？んーならば修行してくればよかろう」

サ「御意、じゃあ、死の森行こうぜ？」

「「「「あつそれいいね（な）！！」」」」

死の森はナルト達の修行場と化していて、猛獣もナルト達には敵わない

それからサトシ達は夜明けまで死の森で訛った体を動かしていたのだった

第5話 認めるか認められるか……

それから3日経った、すると……

「不合格!!」

という声だったその理由は……?

イ「お前……あいつらもそうだがこれで卒業試験で不合格は3回目だぞ!!」

ナ「うっ……(つて一丁前にナレーション入ってんじゃない!!)」

はいそこつつこまないでね

「イルカ先生ナルト君達はこれで3回目これで許してやつても……?」

と言ってるのはアカデミー教師ミズキだった

イ「確かに、これでこいつらは3回目……でもこれは卒業試験です、甘やかしてはいけない……そうでしょ? ミズキ先生」

ミ「ですが……」

ナ「クソっ!! また来年かってばよ!!!」 タッタッタ!! ガラ!! ガタン!!

イ「ナルト……」

ミ「ナルト君」

あのアカデミーのブランコの所

サ「ナルト! どうだった?」

ナ「……」

ヒロインズ「?」

ナ「……」ニンマリ笑顔「ばっちし、不合格なっただてばよ!!」

サ「つて口調がてばよ付いてんぞ?」

ナ「それは気にしないしな」

サ「気になるけど、まっつかじゃあ、落ち込んだ”ふり”すんぞ?」

ヒロインズ「うん……」

サ「つてなるの早っ!? つとくそ……」

そんなギャグトーク?(ギャグトーク言うな!!)……ナレーションに突つかからない
でよまっつか、そんな会話があつてサトシ達が落ち込んだ”ふり”をした後話声が聞
こえた

「お母さーん!!合格したよ!!」

「よかったわね、今日は赤飯ね」

「やった!!」

という話やら

「ねえ…あの子達、また不合格ですってよ？」

「また？まあ…他の子は兎も角あの子は…「ちよつとその先は禁句よ」

というあるヒソヒソ話が聞こえた

ナルト達はそんな会話を聞いてナルトはブランコに乗って…

ぎん…ぎん…ぎん…

すると声が聞こえた…

「君たちこんな所にいたんだね？」

サ「ミズキ先生？（来たなミズキ…）」

その声の正体はミズキだった

ミズ「みんなに話を聞いて欲しいんだ」

アカデミー前

ナ「ミズキ先生なんだってばよ？（さてなんていうか）」

ミズ「残念だったね？僕からも、君達をイルカ先生に合格できるように頼んだんだけ

どね？」

サ「もう、いいよ……」

ナ「そうだってばよ……」

「「「……………」」」

ミズ「まあ、そんな事言わずにさ？ そうだ！ 僕が言うものを取ってきてくれたら、合格させてあげるよ!!？」

ナ「ほんとか!!？ 何をすればいいんだってばよ!!？」

ミズ「いい子だね？ それは……………」

「……………」

「火影様!!？ ナルト、サトシ、カスミ、ハルカ、ヒカリ、ミクが封印書を持ち出しました!!？」

ヒル「なんじやと!!?? 早く見つけ出すんじや!!？」

「了解しました!!？」

「……………」

ヒル「…………ナルト、いや影分身か…………」

影ナ「ああ…サトシの言う通りミズキ先生がサトシや本体に封印書を盗めば、合格してもらえるって、言われて、偽の封印書を盗んだって事をジツちゃんに知らせてくれたって言われた」

ヒル「わかった、して今ナルト達は？」

影ナ「いつもの所だ、じゃあ俺は消えるな」ポンツ
ヒル「わかった………ミズキよ、そなたは本当に………」

———
どこかの森

サ「もうそろそろ、イルカ先生が来るんだけどな」

ナ「お前は、なんでそんなに呑気なんだよ。」

カ「それがサトシだから、しょうがないでしょ？」

ハ「そうかも」

ヒ「ハハ……」

ミ「それがサトシだからね」

ナ「今頃、俺の分身がじじいに知らせてる……つと戻ったみたいだな、ちゃんと知らせたみたいだ。」

サ「おつ、よつしゃ、もうそr「コラアアアお前らあああああ!!？」きたみたいだな」

———
サトシ side

『あつ!!？鼻血ブウ見つけ!!？』

イ「バカ者!!? 見つけたのは俺の方だ!!?」

ナ「へへ……見つかっちゃまったか、一つしか覚えてないのによ!!? (とつくの昔に覚えてたけど)」

イ「お前ら、ボロボロじゃないか……何してたんだ?」

サ「そんな事より!!? あのさ! あのさ! これからすっごい術見せるからさ!!?」

ナ「それ見て、卒業させてくれってばよ!!?」

イ「(じゃあここですつと……こんなにボロボロになるまで……こいつら) お前ら……」

『ん?』

イ「ナルト……お前の背中にある巻物は?」

サ「あつ!!? これか!!? ミズキ先生が教えてくれたんだ!!? この場所も聞いて来たんだ!!?」

ナ「ミズキ先生が、これで卒業間違いなしてさ!!? (来たな、ミズキの野郎!!?)」

イ「(ミズキ……!!?) ……!!?」

イルカ先生は、俺達を突き飛ばした

その刹那……無数のクナイが飛んできた…

「よくわかったな……イルカ……」

イ「ミズキ!!?なるほど、そういうことか!!?」
『?』

ミズ「ナルト……巻物を渡せ……」

ナ「あのさ!あのさ!どういう事なんだってば?これ!!?」

サ「どういう事!!?これ?」

カ「え?え?」

ハ「怖いかも……」

ヒ「ヒツ……」

ミ「どういうこと!!?ここ」

イ「ナルト!!?皆!!?その巻物を絶対に渡すな!!?くつ……」

ミ「イルカ先生!!?大丈夫ですか!!?」

イ「大丈夫だ……ミズキ!!?」

イルカ先生は、刺さっていたクナイを抜いた

イ「ナルト、みんな!!?それは禁じ手の忍術を記して封印した危険な物だ!!?ミズキはそれを手に入れるためにお前らを利用したんだ!!?」

ミ「ナルト、サトシ、カスミ、ハルカ、ヒカリ、ミク、それはお前らが持っていて意味がないんだよ!!?本当の事を教えてやるよ……」

イ「バカ!!?よせ!!?」

ミズ「十二年前……化け狐を封印した事件は知って居るな?」

ミズキはナルトや俺達に言い聞かせるように語った…

ミズ「あの事件以来、里では徹底したある掟が作られた」

ナ「……ある、掟? (じじいが定めた俺の中の九尾に関する事を口に出す事を禁じたものか……)」

ミズ「お前の正体が化け狐って事を口にすんなって掟だよ!」

サ「……………」

イ「やめろー!!」

ミズ「イルカの両親を殺し!! 里を壊滅に追い込んだ九尾の妖狐なんだよ!!お前は憧れの火影に封印された挙げ句、里の皆にずっと騙されていたんだよ!!おかしいとは思わなかったか?あんなに毛嫌いされて!!」

俺ははこう思った、この男は屑だ。と、他人を見下し、己の優位を確かめなければ何もしかない。

しかし化け狐という。響きがオレを思考の中に引きずり込んでしまった。

サ「化け狐…か。人つてのは恨みや悲しみを持つと、全く別の物になる、長門なんか

がいい例か。原作のナルトもイルカ先生がいなかったら、ああなつてたかもな」
オレは原作のナルトと長門との違い。それは信じた人が最後まで側に居たか居ないか。

思考にはまっているとナルトを呼ぶ声が耳に入る。

イ「お前は努力家で一途で……そのくせ不器用で誰からも認めてもらえなくて……お前はもう人の苦しみを知っている……今はもうバケ狐じゃない。お前は木の葉隠れの里の……うずまきナルトだ！」

その言葉に目尻が熱くなる。この言葉が原作のナルトをつなぎ止めてくれた。思考にはまっていたせいで飛来する手裏剣への反応が遅れた。

しかし十分回避可能はずだったが……

サ「……え？」

突然、地面に押し倒されたオレとナルト。見上げたそこには口から血をたらしているイルカ先生が……目に飛び込んできた。今の音は……それは……イルカ先生の背に刺さった大きな手裏剣によるものだった。イルカ先生の口からはぼたぼたと血が流れ落ちる、原作の漫画を見た時と同じ感覚を覚えた……

イ「さみしかったんだよなあ……苦しかったんだよなあ……ごめんなあ……ナルト。」
その顔はとても悲しそうだった。

ミズキのせいなのに……わからない……なぜイルカ先生が謝るのか、なぜ泣いているのか。なぜそんなに悲しそうなのか。

ミズ「はっ死に損ないが、二人まとめてあの世に送ってやるよ」
そう言って背中の手裏剣にてを掛けるミズキ。

俺は動けないイルカ先生の前に立つ。

「サトシ?…ナルト?」

ナ「イルカ先生……もう泣かないでいいよ、俺はもう大丈夫だから。確かに俺は毛嫌いされてる。けどな、みんながみんなそうじゃない……俺の友達になってくれた奴がここに……守ってくれた人がここにいる。俺はもう一人じゃない。だから俺は化け狐なんかじゃない、さっきイルカ先生も言うてように……」

ナルト……イルカ先生を認めるのか?

サ「ナルト……イルカ先生を認めるのか……?」

ナ「ああ……」

ミズ「言ってる!化け狐!!」

胸の前で十字の印を結ぶ。

「多重影分身の術!」

俺とナルはだいたい500人に分身する、総勢1000人、ミズキとイルカ先生は驚

きに目を見開く。

ナ「よく覚えておけ！お前を倒した男いや男達を！木の葉のうずまきナルトと」

サ「波風サトシを！」

影分身が一齐に襲い掛かる。影分身が消えると見るも無惨なミズキがあった……

ナ「イルカ先生ありがとう……先生の言葉……とてもうれしかったよ！」

そう言つてイルカ先生に笑い掛けるナルト、本当に認めただな……オレ達とジツちやん以外の人を……

イ「ナルト、ちよつとこつち来て目つむれ」

そう言われイルカ先生のナルは側に行き目をつむる。ゴーグルが外され、代わりに額当てを巻かれた、イルカ先生はナルトに目を開けていいと言われ目を開けた、すると……

イ「卒業おめでとう」

イルカ先生が笑い掛けた。その額に額当ては無く、それはナルトの額にあった。

ナルトは今ここにアカデミーを卒業した……

サトシ side out

—————

それからナルト達は、イルカ先生と別れて、火影の所に向かっていた……ミズキを連れて……

サ「……ナル……」

サトシが俺を呼んだ、理由はあれか……

ナ「ん？」

サ「イルカ先生を認めるのか？ さっきは答えてくれなかったが今はいいだろう？」

カ「そうよ。イルカ先生は確かに好きだけど……」

ナ「……俺をうずまきナルトとして見てくれたのが、サトシ達の他にあいっただけだったんだよ……」

ハ「ナルトが認めたなら何も言わないかも。」

ヒ「そうだね！ ナルトが認めたんなら、大丈夫！ 大丈夫！」

ミ「じゃあ、ナルト、これからどうするの？」

ナ「そりやこの馬鹿をじっちゃんに明け渡して、それから任務だ。」

ミ「任務かあ、最近行ってないから、早く行きたい!!？」

サ「よし！ んじやいっちょよ行きますか!!？」

「「「「おう!!？」」」」」

第6話 木の葉丸との接触：九尾を封印されしナルトの真相：

次の日……

ナルト達は、下忍のための写真を撮っていた……だが……

「お前ら……本当にそんな顔で撮るのか？」

ナ「いいからー！いいからー！はい！（サトシ、覚えとけ……）」

サ「早く早くー！（後でおごるからよ！）」

「チツ、後悔しても知らねーぞ？」

ナ「（すでに後悔だよ！）」

火影邸

ヒル「うーん……ナルト……なぜこれn「サトシが言ったんだからしようがねーだろ！」

サ「だってこれは、原作通りなんだからしやあねーだろ？」

ヒル「その時わしはなんて言ったんじや？」

サ「おいたわしいだってよ！笑つちやうよな！」

ヒル「……………」

ナ「原作のオレ、ぶん殴りてえ……」

カ「まあ…純粋な馬鹿なんだから仕方なかったんじやない？」

サ「そうだよwwwナルwwwそう怒んなってwww」

ナ「だあー!!?サトシ笑いながら言ってるんじやねーぞ!!?」

ヒル「……………」

ナ「つてどうしたんだ?じつちゃん?」

ヒル「お前も笑うようになったのとおもっての…」

サ「俺らが来るまでじつちゃん以外とは話さなかったんだろ?」

ナ「まあな…俺はじつちゃん以外の奴とは一切関わらないって決めてたからな…………で

もおめーらと会えて今は良かったと思ってるよ…………」

カ「それなら良かったわ。つとあの子が来るわよ?」

サ「そうだな!」

ガラ!!?

「じじい!!?勝負だコレ!!?五代目火影はこの木の葉丸だこr」どてッ

木「トラップかコレ…」

「大丈夫ですか!!?お孫様!!?ちなみにトラップなどどこにもありません!!?」

サ「木の葉丸か…実物はかわいいな、それとナルトのことをまだ、九喇嘛と同視して

る時のエビス先生)」

ナ「んだ、こいつ？」

木「ん!？」

エ「んあ！（九尾のガキか。私の嫌いな落ちこぼれだ）」

木「そうか！貴様らが何かしたろコレ！」

カ「あんたがこけただけでしょ!!？」

サ「おい!!？カスミが言うのかよ…」

ナ「おまえはあからさまに落ち込むな？」

エ「こらあ！手を離しなさないか！その方は三代目火影様のお孫様だぞ！」

カ「……」

木「（火影の孫とわかった途端、コレ（エビスのような奴）だもんな、へっ！こいつらも所詮、教師やみんなと一緒なんだ！）へっ！殴れるもんなら、殴って見ろ！どうせお前は火影の孫だからって「んな事知るかってばよ!!？このボケ!!？」」

木「え？（こいつ……）」

エ「なっ、何いっ!!？」

ヒル「（ふう……やれやれ……さすがカスミとナルトじゃな）ナルト、サトシ、カスミ、ハルカ、ヒカリ、ミク、戻るのじゃ」

「『『『『『はあい』』』』」

サトシ達が火影の部屋から去って（正確には影分身のナルトだけ屋根に潜り込んだ）から、エビスは木の葉丸に：

エ「いいですか？あなたはこの三代目火影の孫なのです。いくら殴られたからと言ってあの様なもの達など絶対に相手にしてなりませんぞ？」

木「……………」

エ「あんな者と関わる事はありません…このエリート教師!!？エビスの言う事に間違いはありません！お孫様は五代目火影になりたいのでしょうか？この私が忍術を教えれば、火影の名乗る事は簡単！そう、”私”に教えを請う事こそが五代目火影への一番の近道何ですぞ…わかりましたね、お孫様？つてあれ？」

そこにはもう木の葉丸の姿はなかった…

エ「あれ!?あれ!!??いねーじゃん！」

ヒル「ふう…………どうやらナルトたちのあとつけていったようじゃぞ？」

エ「それは一大事!!？お孫様あああ!!？」

ヒル「……………もう出てきても良いぞ…影ナルよ…」

エビスが去ってから、3代目は屋根裏にいたナルトを呼び出した

ナ「やつぱ、わかってたのか。よく本体じゃないってわかったな…」

ヒル「当たり前じゃろう……。あんなに（エビスが気づかないほどの）殺気を出しておつたのじゃ、もういつお前が立場を蹴つて出てくるか、冷や汗をかいておつたわ」

ナ「あはは……。だけど止めたじゃねーか」

ヒル「たしかにのう……。わしの孫を見てどう思う？」

ナ「……………ただの独りよがりの自己満足者、里の裏の事を知らないただのガキ」

ヒル「やはりのう……。お前からも見る通りあやつは、わしの孫というだけでちやほやされておつた……。だがあやつは、それを好まなくてな……。ああやつて来ては火影のわしを……………」

バツキ！

大きな殴る音が聞こえた影ナルが壁を思いつきり殴つたのだ

ナ「倒そうとしてるって……………？里の闇を知らねーガキが、火影を倒そうとしてるってか。」

三代目は煙管を吹きながら

ヒル「あいつにはいや、今の子供達には里の闇を知らせる切りはない……………子供達には闇を知らない方がいいのじゃよ……」

ナ「……………俺の本体はじつちゃんに仇なす者は片っ端から潰していくからな……………それはあいつらも一緒だ。」

ヒル「……あれでもわしの孫じゃ……丁寧扱えよ？」

ナ「気が向いたらな？じゃあ俺は消えるわ。」ポンツ

ヒル「……もうあやつらが来てから、5年か……」

そんな火影の呟きを聴いてた者はいなかった……いや……

「どういう事だ？」

さて、これは誰なのだろうか……

—————

ナルト達は歩道を歩いていた……すると……

ナ「つと、影分身が戻ってきた……ほほう……」

サ「なんだって？」

ナ「ああ……」

ナルトはサトシ達にエビスの事、影ナルと火影の話話した

サ「子供達には、里の闇を知らせる切りはない……か。まあ……そうだな……」

カ「やっぱり、三代目の言葉はありがたみを感じるわね。」

ハ「ええ……」

ヒ「絶対に助けなきや……」

ミ「ヒカリ……そうね。ヒルゼン様は異世界の私達を快く向かい入れた……だから大蛇丸なんかに殺させやしない……」

サ「ああ！それに再不斬の事も……つと付いてくんない？！？なんなんだよ！」
壁がうごきだした。

ナ「だからバレバレなんだってばよ！」

木「フツフツフツ、よくぞ見破った！お前達の子分になつてもいいんだコレ！！？」

「「「「は（あ）？」「」」」」

木「その代わり！！？じじいを倒したと言われたお色気の術を教えて欲しいんだコレ！！」

ナ「じようだんじゃねーってばよく（本当にガキだな……）」

カ「そうよく」

ハ「下忍になつたばかりなのにねえ」

ヒ「うんうん！！？」

木「そんなこと言わずに頼む。親分達！！？」

ミ「え？親分？（ナルト乗ってよ）」

ナ「ん？親分？（わーったよ……めんどくせえけどいつちよ頑張るか。）」

木「うん！親分！親分ーん！！？」

ナ「し、仕方ねーな〜」

木「(ぶつ、ちよろいぞコレ)」

サ「(つて思ってるだろうなあ木の葉丸〜)」

—————

ナ「いいか？忍術をうまく使うにはチャトラをうまく操らないダメなんだつてばよ!!」
?」

木「チャトラ?」(にやーん)

ナ「そう、チャトラだ! (恥ずい恥ずい! わざとだけど、原作のオレ本当に馬鹿か!)」

木「親分?それを言うならチャクラじゃないかコレ」

ナ「んぐ! (んなもんしつてわ! ボケ!)」

『ふははは! 傑作だな! ナルト!』

ナ「(九喇嘛! てめえ起きてたのか!)」

『こんな面白いもん寝ずにみるわ!』

ナ「(九喇嘛、てめえ!!?)」

木「親分?」

ナ「んあ?あ、ごめん! 出きる忍はそう呼ぶんだ! (とでも言つとくか。)」

木「そうなのかコレ! 知らなかったコレ!」

カ「え……ええ？」

ナ「(アホすぎんだろ。ほんとにあのじじいの孫か?) ヒル(いえーい?) (何か聞こえたような…) いいか? チャクラ……って言うのは」

木「簡単に言うとな術を使う時に必要なエネルギーの事だコレ！」

ナ「んー? (何だここだけは知ってるんだな)」

木「つまり、忍術っていうのはこのチャクラっていう身体中の細胞の一つ一つから、集められた、身体エネルギーの事、修行や経験で積み上げられた、精神エネルギーの二つを合わせて、印を結んで、こうやって発動すんだコレ!!?」

と巻物を見ながら言う木の葉丸

「「「「「って知ったかぶりして巻物呼ぶな! (んじゃないないわよ!) (じゃねーよ!!
?)」」」」」

木「んぐ!」

サ「まあ!色々御託は並べているが、そう早く使える物じゃないんだ! (俺も2年間で修行を積んだからな)」

ナ「術を早く、使うためには!ようするに……」

木「ようするに!!」

カ「努力と根性だよ!」

木「努力と根性かコレ！」

ミ「そうよ！これからビシビシ鍛えてやるからね！ふふふ！覚悟してね？」

木「おーつす親分！」

と木の葉丸は元氣よく頷いたそれを見たナルトとサトシは……………

「(出た…………どSのミクの顔…………木の葉丸…………アーメン)」

と思っていた

ちなみに先ほどから全く話さないヒカリとハルカは先に帰ったそうなの

—————

その時エビスは…………

エ「あの小僧!!?どこ行った！(私は未来の火影候補になる子を育ててきたエリート

教師、私が生徒に付く虫は…………必ず排除する!)」

と思っていた…………そこには…………

「(ふーん、このヘタレ教師…………そんな事思ってたのか…………本体報告だ…)」ポントツ

影ナルの姿があつた……

エ「?誰かいたようなの？」

影ナルの言う通りヘタレなのかもしれない…………

ミ「はい、休憩よ！」

木「ハアハアハア……おつす！（意外ときついぞコレ！）」

「ハハハ……今日も絶好調だな」

ミ「ふふ♪ありがと♪」

ナ「サトシ……ミクは絶対にに敵にまわしちや行けねーな……」

サ「……あ、ああ」

—————

ナ「ほら飲めつてばよ！」

木「ありがとコレ！」

サ「さんきゅ！」

カ「ありがと！」

ミ「ありがとう！私のナル「みなまで言うな？」はいはい♪」

サ「そういえばなんで、じつちゃんをくつてかかってんだ？」

ナ「そうだってばよ！（言いように言つちやあタダじやおかねー）」

木の葉丸はナルト達を少し見て、話し出した

木「…木の葉丸って名前じいちちゃんがつけてくれたんだ……この里にあやかっ……でも……これだけ聞きなれた名前なのに……誰一人！誰一人名前前で呼んでくれない……」

みんな俺を見る時は………火影の………じいちゃんの孫として見てる………誰もオレ自身を認めてくれない………もうやなんだ！そんなの………だから、だから今すぐにでも火影の名前がほしんだ！」

ナ「バーカ、お前みたいなのやつ誰が認めるか、(クソ)ガキが語るほど………名前じゃねーんだよ(クソガキが)」

木「何いー！」

ナ「………簡単じゃねーんだ。火影火影ってそんなに火影の名前が欲しけりやなあー！「なんだよー！」この俺をいや………(暗部の)オレ達をぶつ倒してからはやがれ………俺たちをなー！」

と暗部の部分を出しながらナルトは言い切った………

—————

三代目は、火影邸の屋根の上に佇んでいた、すると………

「三代目、捜しましたよ………」

ヒル「おお……イルカか」

イ「三代目、ナルト達はみんなで忍者登録書出しましたか？先日、ラーメン屋で、説教してやったんですが、一端の忍者になって自分の事を認めてもらえさせてもらって！もう浮かればつなしで〜」

ヒル「ナルトの夢は、里の皆に認めてもらい、誰よりも強い火影になる事じゃ、じゃがあ……なかなか難しいかもしれんのか……（ほんとにそう思うようになったらしいが、誰よりも強いのは叶えしもうてるのか）お前も知ってる通り、ナルトに九尾の狐（和解済みじゃが）封印されている事を知っておるのは、12年前のあの日、化け狐と戦った大人達だけじゃ、このわしはこの事、口内にし、掟を作った（本人は知ってるがのう）、それを破ったものは厳しい罰（ナルト本人が）与えてきたよって、今の子らはその事を知らぬ！（サトシ達は知っておるが例外じゃな）ナルトにとつてそれがせめてもの救いじゃ……ミナトは里の者達に英雄として、見て欲しかったんじゃ……それを願って封印し、クシナと共に死んだ……」

イ「英雄……？」

ヒル「ミナトはへその緒を切ったばかりの赤ん坊のへそに九尾を封印したのじゃ……ナルトは、九尾の化け物の入れ物なつてくれたんじゃ……しかし、里の大人達はそういう目では見ず……中にはナルトの事を九尾の狐と呼ぶ者もいる（それがあやつが暗部に入った理由かものう……）これがナルトに対する大人達の態度が知らず知らずのうちに子

供達まで伝わってしまったのじゃ…」

イ「……………」

ヒル「イルカよ。知っておるか。」

イ「な、何です？」

ヒル「人間は他人を嫌い、その存在を認めない事じゃ、その存在を見れば、恐ろしいほど冷たい目になるのじゃぞ…（エビスの様にな…………）」

イ「あつ……………」

—————

と火影がイルカに語っている頃エビスはというと…

エ「お孫様見つけましたぞ！」

木「げっ！」

木の葉丸+αを見つけていた（後で覚えてろ…駄作者が！）

エ「……………ふっ（化け狐とその他の落ちこぼれと一緒にいたか）」

ナ「…………（またあの目、殺したくなってくる…………）」

サ「ナル？」

ナ「わーってるよ」

エ「さっ！お孫様、帰りましょう！」

木「嫌だ！俺はじじい倒して、火影の名前もらうんだ、今すぐ！じやまするな！」

エ「火影様には知識、人徳、名声と千以上の術を使いこなせてから、初めて……」
「んー
変化！」
ジユボー

木「喰らえくお色気の術〜」

エ「だああああー！」

木「あれ？効かねーぞ？」

「「「(当たり前でしょ、アホ)「「「

エ「な、な、な、なんという！お下品な術をおお!!？私は紳士です！そんな下劣な術に引っかけりませんぞ!!？んかあ！お孫様帰りますぞつてあれ？」

木の葉丸のいたところには丸太が……

木「捕まんねーぞコレ！」

エ「身代わり!!??(まさかこの中の誰かが？そんなはずは……)」

木「ミクの姉さん、できたぞこれ!!？」

ミ「うん、うんばつちしだったよ！木の葉丸♪」

エ「(あの子が？お孫様がここまでの変わり身の術や下劣な術を彼女が?) つとさあさあ！そんなバカな奴のところにいるとバカになってしまいますぞ！、ングー私の言う通りにするのが火影の名をもらう一番の近道なのですぞ！ささ帰りましょう！」

木「イヤーだ！」

「影分身の術！」

木、エ「ん?!」

シユボ!シユボ!

木「うおーすげーコレ〜！」

そこには、ミズキの時より少な目で、24人の影分身を出した

エ「ふん…なんのつもりだ?こう見えても私はエリート教師……ミズキなどとは違うのですよ。」

そう言つて、ナルト、サトシの影分身の中に入つていくエb……ヘタレ教師

エ「ふっ!」

ナ「……ニヤリ、変化!」

サ「変化!」

「「「」

ナ「エビス様♡」

サ「エビスのおじ様♡」

エ「ぎゃああああああああああああ」ぶうううううううう

ナ「名付けて!」

サ「大ハーレムの術！」

と言ったところを火影とハルカ、ヒカリは見ていた……

ヒル「まったく、余計なもの作ったものだけだわい」

ハ「私より巨乳なのがいかに！」

ヒ「ハルカ！突っ込むところ違うよ!!??」

ハ「あつ……カスミとミクにいつとかなね……もうその術をさせるなつて……」

ハイライトを失って語っていたハルカは、身も毛もよだつようだったと火影は語って
いた……

—————

夕方になり……木の葉丸が……

木「クソオオ、エロメガネすら倒せなかったコレ！俺は早く「俺も一緒だよ。」え？」

ナ「俺も同じだ……俺も里のみんなに認めさせたいって思ってるんだ……」

木「そうなのかコレ？」

ナ「ああ！俺は里ではあいつみたいいな目で見られてるんだ……でもこいつらや、イルカ先生、三代目火影のじつちゃん俺を認めてくれたんだ……」

サ「ナルト……（原作のナルト以上に里のみんなに認めさせたいって思ってるんだな）」

木「じじいが？」

ナ「ああ…俺もこうなるまですごい時間があったんだぞ！みんながみんな、認めてくれる火影ってすげー忍者になるまでは時間がかかるけど、ぜってえ…火影に近道なんかねーって俺は思ってるってばよ!!？」

木「はっ、（この俺をいや…オレ達をぶっ倒してからは言いやがれ…俺たちをな！）ふん、えつらそうに説教してくさりやがって！俺、もう子分やーめた！これからは…ライバルだ！」

ナ「ふっ（ライバルか…）」

サ「俺も、ライバルだな？木の葉丸？」

木「そうだコレ！カスミ姉ちゃんも、ミク姉ちゃんもライバルだ！」

カ「わ、私も!!??ちよつとくそれは男子だけにしよ〜」

ミ「いいじゃない、何か楽しそうかも♪」

カ「もうほんとにミクは…、そうね、木の葉丸のライバルがこんなにいたんじや勝てないかもよ？それに私達は……」

ナ「もう下忍だ！一足早くな！でも、まあ…いつか火影の名を巡ってお前と勝負してやんよ!!?…それまで楽しみにしとけよな…木の葉丸！」

ナルト達が去っているのを見ながら、敬礼をする木の葉丸……そして…

木「……約束だぞコレ！」

ナ「おう！」

それを見ていた、火影、ハルカ、ヒカリは……

ヒル「木の葉丸……本当の忍者への道は……まだまだこれからじゃよ……」

ハ「んゝこのシーンほんとに好き!!？」

ヒ「そうよねゝ、ナルトがスレナルなのが一番いいけどね？」

そんな話をしてると……

「それ、なんて言えばいいんだよ？」

「「ビクツ!!??ナルト!!??」」

ナ「はあ……じじいは兎も角ハルカにヒカリはビクるなよ？」

ヒ「へへへ♪ついでよっい♪」

ハ「私は、すぐく油断してた……つてのは冗談で」

ナ「くうゝ、おめーら!!？」

サ「まあまあ、無事に解決したんだからいいじゃねーか、さて次は、班決めか。」

ナ「俺はいいとしてお前らはどうなるんだろうな？」

サ「それは、明日になってからのお楽しみだよ。」

カ「そうそう！」

ヒル「おつ、そうじゃ久々に任務に行くか？」

「「「「行く！」」」」」

ヒル「おお…そうかそれはな……」

物語は進んでいく……

第7話 班決め決定！第7班、第8班、第10班！波乱な7班の自己紹介？

3日後、8月の15日

ナルト、サトシは（女子軍は、同じアパートの一室にいる）、同じアパートに住んでいて、瞬間二人同時に起き、あくびをしたあとに、”8月15日”に印をつけて運命の日と書いてある…そして

サ「いただきます！」

ナ「お前…何でそんなに元気なんだよ？」

そう…三代目は、問答無用でこの3日間連続で暗部のSSSランクの任務が入っていてみんな忙しかったのだ…ナルトは今も疲れていた、それでいいのか総隊長…

サ「だってよ！今日はあの運命の日なんだぜ!!？ワクワクしてよ！」

ナ「お前…楽しんでんだろ？」

サ「そりやこのNARUTOの世界に来たからには死ぬ人（三代目や自来也など）とか里抜け（サスケ）とかをとめてーじゃん？だからだよ」

ナ「なるほどな？早く食うぞ？」

サ「おう!!?」

ナルトとサトシは、そうそうにラーメンを食べて、カスミ達と合流し、アカデミーに向かった……

アカデミー

ナ「たくツ木の葉丸はどれだけ暇なんだよ!!?」

サ「ハハハ……しやあねーんじやねえか?ライバルって言ったんだからよ!!?」

ナ「お前……これも狙ってたのか?」

サ「……じゃ、行くぞ!!?」

ナ「逃げてんじやねーぞ!!?サトシ!!?」

カ「ほんとにこの2人はなかないわね」

ミ「ほんととね、私もサクラと仲良くなりたいたいなく(ナルトとサトシはアニメの主人

公だから仲いいねー)」

ハ「ミク……何か心の声らしき物が聞こえたんですけど?」

ミ「ふえ?気にしない気にしない!!?」

ヒ「ほんとにー?」

ミ「ほんととつてば!」

ヒ「ならいいやあ」

ミ「うん！」

サ「じゃあ、行こうか!!？」

「「「「おう!!？」」」」

説明会室

ナ「じゃあ座ろーぜ!!？」

シ「ん？何でお前らが居るんだよ？ここは卒業生だけの卒業会だぞ？（親父から聞いたぜ？）」

ナ「おっ!!？シカマル！お前さ、お前さ！この額当てが目に入らぬか!!？俺も今日から忍者だつてばさ！（おう！）」

サ「そうそう！俺らもな！（シカクさんによろしく言っておいてくれ！）」

シ「そうか、よかつたな、俺は寝る（了解）」

という話を聞いてた者がいた：

ヒナ「な、ナルト君：サトシ君：卒業できたんだ！」
がら！

「「ふんふん！ゴール!!？」」

「「あつ：（春野）サクラといのが来たな：）」

カ「来た来た：」

ヒ「うるさい……」

ハ「めんどくさいのが1人……」

ミ「こらみんな、聞こえたらどうすんの!!?」

サク「聞こえてるわよ!」

「「ごめんさーい」」

などと新喜劇風になっている中……ナルトとサトシはというと?

ナ「(はあ……めんどくせえ、あいつまたサスケの方を見たぞ?)」

サ「(仕方ねーんじゃねーの? サクラはこの頃サスケの事を好きだったんだからよ?)」

ナ「(今からあいつにガンかけてくるわ)」

サ「(ああ! 気をつけろよ? お前のファースト(わーってるよ)ならよろしい)」

ナルトはそう言った通りサスケと睨み合った

ナ「んんんん」

サク「ナルトおー! サスケ君にガンたれてんじやないわよ!!?」

ナ「(はあ……) サクラちゃん……(まあ、女どもは、サスケサスケってこんなガキのどこがいいんだ?)」

目からビーム!!?

「サスケ君！そんなやつやさしちやえ！」

ナ「(さつきからうるせえーな、つとそろそろ……………) 影分身の術！上にと！」

サ「影ナルを犠牲につて結局はファースト取られるじゃねーかよ」

カ「総隊長とあろうもんがね？」

サ「ナルトつて男が好きなのか？」

「「「それだったら、サトシが襲われてるでしょ!!?」」」

サ「あつ…それもそうか!!?」

とそんな会話をしていたら……

『『『キヤアアアアあああ!!?』』』

という叫び声が……

ナ「うえええええ」

サス「うおおおお」

影ナ「あつ…殺気?え?」

見てみるとサクラ(といの)を含む複数のサスケファンに取り囲まれていた……

サク「ナルト……あんたね」

影ナ「(本体)のやろおおおお(いやこれ事故……)」

サク「うざい!!?」

ナ「(わりい。影ナル!今度おごるからよ!)(元からそのつもりだ。バカ!) おお!
それにしても、うざいつてなんだよあのアマあ、戻るか。」

ナ「よつと……」

サ「あつ……おかえりく結構早かったな」

ナ「まあな!影ナルに奢らなきやいけねーんだよな」

サ「そりやそうだろ?あんな目に合わしたんだからよ!」

ナ「だな」

ナルトとサトシが話していたら……

い「あつ!ナルトもだけどサトシにカスミ!ハルカもヒカりにミクも!合格してたんだあ!」

いのが来た……

サ「あつ!いのくおはよー!そうなんだ!ナルト達と一緒にイルカ先生に卒業させてもらったんだ!」

い「よかつたじゃない!パパも喜ぶわ!」

サ「あつ!ナルト、シカクさんといのいちさんとチョウザさんに合格したこと忘れてたな?」

ナ「ああ、まあわかるんじやねーの……猪鹿蝶の三人だけ?それかあのミズキの件を

じじいと一緒に見てたか今も見てるかも知んねーしよ?」

サ「ああ：そうか、今頃担当上忍は水晶で見てるはずだしな?」

カ「そうね：いの、いのいちさん今は?」

い「パパ?私が出るときは家にいたはずだけど?」

サ「その後に出たかもな?」

い「ああ〜そうかもね〜、ってサトシ以外疲れてない?昨日までやってたの?」

ナ「そうなんだぜ?あのじじい今日まで、問答無用でSSSランクをやれって言いやがってよ!それにそれを50個だぞ!総隊長でも限度があるつてもんだよ!」

い「三代目って：：本当に鬼ね〜」

カ「まあ、女の私達は20個前後だったけどね?それとサトシはこんなにピンピンなのは、今日を迎えたからテンションが上がってんのよ。」

い「ああ〜なるほどね?」

この会話を聞いたらわかる通り猪鹿蝶の、奈良一族、山中一族、秋道一族は、サトシ達の正体やナルトの素を知ってるのである。

ナ「おっと、話してから先生がきてるぞ!おら!シカマル起きろ!」

シ「んあ?ああ：：さんきゅ」

すると、イルカ先生は入ってきた：

イルカは、下忍になるに当たったの事を話していた…

イ「今日から君たちには里からの任務が与えられるわけだが、今後は3人1組の班を作り、各班に一人ずつ上忍の先生方が付き、任務を遂行することになるだが、今年も人数も多いので何班かは四人か五人だ」

ナ「(4人か5人か)」

サ「(うげ!!??まあ、しょうがねーか?)」

サク「(三人一組!!?)」

い「(ふーん…:カマかけてみましょ) 誰がサスケくんと同じ班になるかしら?」

サク「さ、さあね? (しゃーんなる! サスケくんと組む事になるのはこの私よ!!?)」

サス「チツ、3人一組か…:足手まといが増えるだけだ…」

「(すかしてんじやぞ、サスケエ)」

イ「班は力のバランスが均等になるよう、こつちで決めた。」

「えー!!?なんでなんで!!?」

「んなアホな!」

イ「静かに!!?それでは発表する!」

刻々と6班まで決められた結果、ナルト達の名はまだ出なかつた…そしてー…
イ「では第7班を発表する！」

サ「(!!?…来た来た!!?)」

ナ「俺、サスケ、春野サクラはいいが他の2人は誰なんだ？」

サク「サスケくんとうるか！」

ミ「(このドキドキ感！たまらない!!?)」

イ「で発表する！うずまきナルト、春野サクラー…」

サク「(うげ！サスケくんとは違って、ナルト!!?)」

イ「そして、うちはサスケ、波風サトシ、海覇カスミ！」

カ「あつ！サトシと一緒にだあ」

サ「(こういう結果か…) サクラちゃんとだあ!!?’」

サク「(サスケくんと一緒に！カスミと？うまくいけるかな」

ヒナ「(ナルト君とサトシ君は別のチームか…)」

イ「次8班、日向ひなた！犬塚キバ！油女シノ！花澤ハルカ！古川ヒカリ！」

ヒナ「あつ！はい！(ハルカちゃんとヒカリちゃんとだ！キバ君ともシノ君とも！)」

キ「はいよ(ハルカやヒカリ、ヒナタにシノか…ヒナタとだ！)」

シノ「うぬ……」

ハ「ヒカリと一緒にでヒナタ!!??やったね♪キバからヒナタを守らなきゃね♪」はあい
!

ヒ「キバとシノかあ、ヒナタとは面識あるけどキバ達とはあんまなんだよなあ」
はい!

イ「次9班ー……」

サク「やったね♪ふふーん♪」

い「サクラ私に自慢してるつもりだけど、私…サスケ君じゃないのよね、でも一応
!」なんでよ!もう……」

シカ「お前…サスケだったか?」

い「違うわよ!ナルトとサトシに決まってるでしょ!」

シカ「だよな…」

イ「では第10班!山中いの!奈良シカマル!秋道チョウジ!鳴浜ミク!」

い「えー?」

シカ「組む事になったらしいぞ?」

い「幼馴染だからなの?そうなの?でもいいかミクいるし…」

ミ「いのちゃん!よろしくね!」

い「はいはい、よろしく♪」

チヨ「もぐもぐ……」

イ「ではこれで終了する」

と班決めが終わったところで……サトシが……

サ「サトシ……」

ナ「はあ……わーったよ……イルカ先生!!?なんで優秀な俺とサトシがサスケ(のガキ)と一緒にんだってばよ!」

イ「はあ……サスケは卒業生トップの成績、ナルトにサトシお前らは成績ドベ、班の力を均等にしようとするとう当然こうなるんだよ!」

サス「せいぜい、俺の足をひっぱんなよ!ドベ共……」

ナ「んくー! (はあ……本当だった俺がトップだったのにな、サトシが言うからドベになつたんだよ……お前……いつかぶつ潰すぞ!)」

サ「んだとおお! (お前なあ……堪えろって、ぶつ潰すなバカ!)」

サス「なんだ?やるかドベ……」

ナ「お前!」やめなさいナルトにサトシ!

イ「はあ……午後から担当の上忍を紹介する!それまで解散!」

それから色々あつて、サトシ達は担当上忍を待っていた……しかし……

サク「もう!何でこんなに遅いのよ!」

ナ「本当だってばよ! (カカシ上忍、あいつ何やってんだ!あのバカ!)」

サ「そうだな! (はあ…こんなに遅いとはなあ)」

それから1時間後……

サク「ちよつとやめなさいよ!ナルト! (こういうの好きなのよね!)」

ナ「遅れてくる奴が悪いんだってばよ! (はあ…こんなのに引つかかるバカはいねーよな?)」

サ「お前最高! (それが引つかかるんだなあ、まあわざとらしいが)」

すると……

ガラ!ポス……

「「「「……………」」」」

ナ「ぶっはっはっは!引つかかったでやんの! (ま、まじかよ)」

カカ「お前らの印象は……………嫌いだ!」

そして場所を移して、カカシはこう告げた…。

カカ「まずは自己紹介をしてもらおう。」

サク「どんなこと言えればいいのよ!」

カカ「そりやあ、好きなもの嫌いなもの、将来の夢とか趣味とか……ま！そんなのだ。」
サク「まずは先生から教えてよ！何もわからないしき！」

カカ「あ……俺か？俺は、はたけカカシって名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない！将来の夢って言われてもなあ……ま！趣味は色々だ……。」

サク「ねえ……結局わかったのって名前だけじゃない？」

カ「ははは……確かに（普通忍びは簡単に情報を言っただけじゃないからに決まってるでしょ！）」

カカ「じゃあお前から」

ナ「俺さ！俺さ！名前はうずまきナルト！好きなものはイルカ先生に奢ってもらった一楽のラーメン！嫌いなものは仲間を傷つけるやつ！将来の夢は……みんなに認められるような火影になって、悪者から里を守る忍びになる事だつてばよ！趣味は、封印s……イタズラだつてばよ！」

ナルトは、趣味を封印所を解く事を言おうとしていたがそれはまずいと思いイタズラに変えたのだつた

カカ「（ナルトか……なかなか面白い成長してるな）ん……次」

サ「俺の名前は波風サトシ！好きなものはナルトと一緒に！嫌いなものはナルト達に暴力するやつ！将来の夢は……伝説の三忍みたいな忍びになる事と里を守りたい事！」

趣味はナルトと一緒にです!」

カカ「(こいつもいい成長してるな)次はオレンジ色の子…」

カ「私は、海覇カスミ!好きな物はナルト達といる時間!嫌いな物とういうか嫌いなことはサクラのナルト達に対する態度…!将来の夢は…:ナルトやサトシを守り、伝説の三忍の一人の綱手様の三番弟子になる事!趣味は読書とイタズラ!」

サク「ちよ、何よ!それ!」

カ「何!文句あんの!!?」

サク「大有りよ!ドベのくせに!」

カ「それとこれとは関係ないでしょ!」

カカ「カスミはサクラと仲が悪いか…:イルカお前それを知ってて入れたのか?」落ち着きなさいよ、まだ自己紹介の途中なんだから、次」

サス「俺はうちはサスケ…:嫌いなものならたくさんあるが、好きなものは別にない…:夢なんて甘つちよろいもんで済ますつもりはないが野望はある、うちは一族の復興と…:」

サ「イタチさんを殺すことか?」

ナ「サトシ!!?それは(いいのかよ?)」

サ「そうだろ?サスケ…:(ああ…:どうせ原作沿いが出来てる訳でもないからもう

言っておく)」

若干、僕に対する侮辱に聞こえちゃうけど、サトシはそういった、そう言われたサスケは——：

サス「……!!? 何故それをお前らが知ってるんだ! 何か知ってるのか!」

サ「知ってるも何も、うちは一族は滅んでないしさ? イタチさんもこの里のどこかにいるし」

カカ「お前らが何故それを! 極秘のことだぞ!」

ナ「じつちゃんが話してるところ聞いたんだ、イタチ兄ちゃんとの話をね?」

カカ「……そうなのか……」

サス「教えてろ! 今うちは一族はどこにあるんだ!」

ナ「つて言われてもなあ……俺さ俺さ? 知らないんだつてばよ! そこまで聞いてないからさ? じつちゃんに聞いてみてよ……つて自己紹介の続きだつてばよ!!?」

カカ「あつ、ああ……サクラ色の子」

サク「……あつ! はい! 私は春野サクラで好きなものはあ……つてゆーかあ、好きな人はあえーとお、将来の夢も言っちゃおうかなあ……」

ナ「(早よ言えやバカ)」

カ「はあ……」

カカ「ああ…はいはいわかった、嫌いな物は？」

サク「サトシとナルトです！」

とサクラが言ったら……

ブチイツ!

という何かが切れる音が聞こえた……

「あちやーカスミの堪忍袋の尾が切れたあ」

サク「え？」

その刹那……

カ「あんたね!!? なんなの本当に!!? サトシとナルトが何かした? してないでしょ? それなのになんで嫌うのよ!!? ナルトとサトシがあんたに何かしたなら納得がいくわよ!!? でもね!!? サトシとナルトはね! それでもあんたを本気で好き(というフリ)なのよ! それが嫌なら! きっぱり断ったらいいでしょ! 私はサスケのことが好きだから諦めてって! それにカカシ先生は嫌いな物って言ったでしょ! ナルトとサトシは物じゃないのよ! 人なのよ! 一人の人間なの!!? そんな理由だったら、私は……」

サ「カスミ…もう言うなってサクラちゃんが泣いてる……」

サク「ふつく、ヒック」

カ「……………！ごめん……言いすぎた……先生……先に帰りますね……」

カスミは堪忍袋の尾が切れた勢いでサクラに對する鬱憤をふりまいた、サトシが止めたら、サクラが泣いていたことに気づき、カスミは居た堪れなくなり帰ろうとしたのだが、カカシは……

カカ「いや……まだ話の続きが……」

ナ「先生……カスミには後で伝えておくつてばよ！だからさだからさ！話の続きをさ！」

カカ「あ、ああ……わかった……カスミ帰っていいよ……」

カ「はい……サクラ、ごめん……言いすぎた、また明日……」

サク「ヒック、わ、かった……」

サ「サクラちゃん、大丈夫……？」

サク「うん……先生……続きを言ってください……」

カカ「あ、ああ……、明日するのは演習だ……」

サク「……………」

サ「(原作ではここでサクラがつっこむんだけどな……) 演習ってどういう事なの？」

カカ「まずは6人でできることをする……」

ナ「何！何何何なあに？(空気がよどんでやがる)」

カカ「ああ…サバイバル演習だ。」

サク「サ…サバイバル演習ですか?」

サス「おい、任務なのに何で演習なんかやるんだ。演習だったらアカデミーで散々やったぞ。」

カカ「ただの演習じゃない!」

サ「サスケが聞くことになったのか…まあアレだったからな…しゃあねーか…」どんな演習なんだ?」

するとカカシは静かに笑いこう放った

ナ「な、何が可笑しいんだってばよ!!?」

カカ「いや、これ聞いたら絶対お前ら引くから」

「(さっさと見えよ、変態上忍)」

なかなか言わない、カカシにナルトとサトシは毒づいた…

カカ「卒業生34名中下忍と認められるのはわずか15名。残りは再びアカデミーに戻される。この演習は、脱落率66%以上の超難関試験だ!」ドヤツ

「「……………」」

カカ「ほら引いた」

「(俺らはカカシ(先生)のドヤ顔に引いたわ!)」

サ「じゃあ、何のための卒業試験だったんだ？」

カカ「あれか？下忍になる者を選抜するだけのもの」

サス「……」

ナ「ぬわーにいいい!!」

カカ「まあ、そういう訳で明日は演習場に来て、合格不合格を判定する…忍び道具一式持って、朝5時集合!!?それとカスミにも言つといてな？」

サク「(……この試験を合格しなくちゃ、サスケ君といられなくなっちゃう!!?……それに明日は、カスミに謝らなくちゃ…サトシにもナルトにも…) サトシ…ナルト」

「ん?なんだつてば?」

サク「前までの態度……ごめんね?カスミにアカデミーの時にカスミやヒカリ、ハルカが言った事今までわからなかった…ごめんなさい」

ナ「良いつてばよ!サクラちゃん!カスミやヒカリ、ハルカの言いたい事がわかってくれればさ!(カスミの良いように)サクラ”も変わったか)」

サ「そうそう!これから7班として頑張ろうな!カスミには明日言つといてくれ!俺も言つとくからさ!(おっ、ナル、サクラの事サクラつて言つたな?)」

ナ「(うっせ、サスケの事はどうする?)」

サ「(その事については、じつちゃんに聞くよ。)」

カカ「じゃあ、話がすんだんなら、今日はここで解散!あと明日はご飯抜いとけよ? 吐くぞ……」

サク「吐くつて……そんなにきついのか!!?」

カカ「ああ、じゃあ明日な……」「じゃあ吐かなければ食べても良いって事か?」

サトシはそれを確認した。

カカ「え?ああまあ、そうだな……じゃあな」ポンツ

サス「……おい!ナルトにサトシ!きつきの「じつちやんに聞けつて言つたら?」お前らに聞いた方が早いだろうが!」

サ「まあ、良いじゃんか!ナルトはこれでも疲れてるからもう帰るな!!?」

ナ「これでもつていうなつてばよ……じゃあ帰るわ!また明日ね?」

2人は速足で帰つていった……

サス「あつ!おい!くそツ!!?(3代目の爺さんは知つてるのか!あの事件の真相を!!?)」

サク「……私帰る……」

サクラはそう言い、帰つていった……

サス「……」

こうして、波乱の7班自己紹介はこうして終わった……

第8話 演習（前編） 2人の少女の友情

次の日：

7班のメンバーが集まっている中カスミの姿はまだ現れなかった……

サク「ナルト…サトシ、カスミは来ないの？」

ナ「サクラちゃん！カスミ何か用事があるみたいで、ちよつと遅れてくるんだつてばよ！」

サ「そうそう！ちよつと待ってくれよな！」

そして少し経ち…

カ「ヤツホー♪遅れた？」

サ「まだカカシ先生は来てないぞ！」

ナ「ああ！」

カ「なら良かった」

サク「か、カスミ！」

カ「ん？どうしたの？」

サク「前までのナルトとサトシの態度…ごめんなさい」

カ「……昨日の後のことサトシ、ナルトから聞いたわ、ちゃんと謝ったみたいだし、許すわよ♪」

サク「あつ、ありがとう!!?」

カ「あつ! そうそう私が遅れたのはね? これ作ってきたの」

カスミが持つていたのは、袋に入ってたお弁当だった

カ「食べてみて!」

サク「でも、先生が食べちゃダメだって…」

サ「サクラちゃん! 先生は抜いてこいつて言ったんだからよ! だから食べてくるんじゃないよ!」

サク「サトシ……そうね……ありがとう」

カ「はい、サスケにも!」

サス「俺はいい!」ギュルルル

と言ったサスケはお腹の虫が泣いていたそれを聞いたナルトは……

ナ「ガツハツハ! お前の腹の虫は正直だってよ!?!?」

サス「くっ!……もろう…」

カ「どうぞどうぞ!」

サスケとサクラは、お弁当を受け取り……

「いただきます」

食べて……食べ終わったら……

「ご馳走様」

カ「お粗末さまでした……どうだった？」

サク「美味しかったよ！」

サス「うまかった……」

カ「良かったあ、あわなかったらどうしようかと思つた！」

「（そんな時は俺らに八つ当たりするつもりだろうが）」

カ「じゃあ、待ちましようか？」

カスミはそう言ったら、サトシが……

サ「あつ！ナルト！カスミちよつと来て！」

ナ「なんだってばよ？」

カ「どうしたの？」

サ「演習が始まつたら、サクラをカスミが説得してくれ、サスケを俺が説得してくる」
カ「ああーわかつたわ、でもいいの？原作の崩壊になるわよ？」

サ「もう、この会話をしてる時点でどうか俺らがここに来た瞬間に原作の崩壊だよ」
カ「それもそうね？ナルトもこんなんだし」

ナ「カスミ!!??それはねーだろ？」

カ「ごめん、ごめん♪じゃあ、ナルトはどうするの？」

サ「ああ…ナルトはー…」

そんなこんなで時間が過ぎたが…カカシはまだ現れなかった…そしてサクラが…

サク「また、あの先生遅刻なの!!??」

サ「ハハハ…確かになあ…ともう来るみたいだぞ？」

サス「何言ってるやがんだ？ウスラトンカチ」

サク「そ、そうよ！何でそんなー…」

サトシがそう言い、サスケとサクラがなぜと聞いた刹那…

ポンッ

「やあく、諸君おはよう」

サク「え!?(本来に来た!!??何でサトシ…わかったんだろう…それにカスミやナルトもわかってた感じだし…何で?)」

サス「何だと!!??(何故だ！こいつ、何故わかったんだ!)」

カカ「ん？どうしたんだ？」

サク「いえ…なんでもないです…」

カカ「そう？いやあ、ごめんな？ちよつとそこでおばあさんが困っててさ」

そう、わかりやすい嘘をつくカカシに対し、みんなは――：

サク「それ、絶対嘘でしょ？」

サス「ふざけんな」

ナル「はい、それ嘘!!？」

サ「大人が嘘ついていいのかよ!!？」

カ「……」

訂正、カスミは何も言わずに、ナルトは嘘と決めつけ、サトシはカカシの嘘に批判し、サクらは曖昧ながらも嘘と決めつけ、サスケは不機嫌気味に言っていた。

カカ「ま、まあなんだ……」

カカシは苦笑いしながら、目覚まし時計の、目覚まし時刻を、セツトする

カカ「よし、11時にセツトっと」

ナ「(11時……？サトシ、漫画の方は12時なのに今は11時なんだ……?)」

サ「(ここで来たか…多分、イレギュラーの俺らが居るからだろう…12時じゃ長いから、11時が変わったんだ……)」

ナ「(そうか) つと先生! 何で時間をセツトしたんだってば?」

カカ「今から説明するから待つてね?」

そう言いながら、カカシは、銀色の鈴を出しこう告げた:

カカ「ここに鈴が4つある、もし昼までにオレから鈴を奪えなかつた奴は昼飯抜き! あのと丸太に縛りつけた上に目の前でオレが弁当を食うから」

カカシはそう言い、サスケとサクラはというと:

サク「嘘! じゃあ、カスミの弁当食べてなかつたら: お昼も食べれなかつたって事なの!!??」

サス「あいつの弁当で命拾いしたって事か: : : : : だが何故さっきのサトシなり、カスミなり、【これ】を知ってるんだ: : :」

と思つていた: : : そしてカカシは続きにこう告げる: :

カカ「鈴は一人1つずつでいい。4つしかないから: : 必然的に一人丸太行きになる: : で! 鈴を取れない奴は任務失敗って事で失格だ! つまりこの中で最低でも一人は学校へ戻つてもらふことになるわけだ、それと手裏剣も使つていいぞ。オレを殺すつもりで来ないと取れないからな」

カカシは、けろりと「バナナはおやつに入りません」というような感覚で言つた: :

サク「でも!! 危ないわよ先生!」

サクラは慌てて言う

サ「カカシ先生、じゃあ忍術や体術も使っていいってことですよね？」

とサトシは、質問する

カカ「ああ、いいぞ。殺すつもりで来いよ」

カカシ先生はにこつと笑って言う

それを聞いたナルトはサトシに……

ナ「（サトシ……俺、手加減できないかも？）」

サ「（はあ……出来るだけ我慢しろ！それが無理なら、九喇嘛に代わってもらえ？あいつ、この前、身体が鈍ってるって言ってたろ？）」

ナ「（アア……御意、出来るだけ自重するよ）」

サ「（頼んだぞ？あとカスミお前は、カカシ先生に訂正はないか聞いてくれ）」

ナルトに強く念を押し、サトシはカスミにその質問をしろと伝えた……

カ「（はいはい）先生？その言葉に訂正ないですよね？」

とにっこり笑顔でカスミは質問した、その言葉にサクラは……

サク「カ、カスミ!? 先生危ないじゃない！」

とサクラはそう言う、だがカスミは……

カ「サクラ……貴方には上忍が偉大なものであることを全く知らないようね？私達下忍

の手裏剣なんて先生は何とも思わないはずだよ。だから大丈夫よ（でも、暗部総隊長には大丈夫じゃないわね）」

こんな形だけどね？と付け加えながら告げる…

サク「そ、それもそうか…、でも！「ま、悪いがその通りなんだ、そろそろ始めるぞ！」……はい！」

カカ「じゃあ、よーい…スタート！」

すると5人は一斉に隠れ始めた…

—————

サバイバル演習が始まってすぐ隠れたカスミはサクラの元に行き協力して5人で鈴を取りに行かないかと提案してみた

サク「え？でも鈴が4つなのにどうしてなの？」

カ「……この演習の答えがチームワークだからだよ」

サク「そうなの!?でも…どうして、それをカスミが知ってるの？」

カ「それは、ちよつと今は言えないの…この演習が終わったら言うわ、その時はナルトとサトシも、ハルカにヒカリ、ミク、シカマル、いの、チョウジが、居るけど大丈夫？」

サク「そんなに？まあ……いいけど……」

すると、サクラは急にうつむき出した、それをカスミがどうしたの？と聞いてみるとサク「……前までのナルトとサトシの態度……本当にごめんなさい。」

カ「もう……まだそれで悩んでいたの？だから言ったでしょ！許すって」

サク「でも！私……アカデミーの時からずっとサトシ、ナルトはウザイ奴としか見てなかったから、だから嫌いだったのでも、自己紹介の時……カスミから言われた通りあの2人は私には何もしてないと思ったの……だから……」

とサクラは他にも言おうとした刹那……

カ「何で泣きながら言ってるの？」

サク「え？……あれ？おかしいな……何でだろ……泣かなくていいのにどうして……？」

カ「……サクラ……！」

カスミは、泣いているサクラに抱きしめた

サク「カ、カスミ……？」

カ「……だから言ったでしょ？あの2人は……もう何とも思っていないって……それにね
？昨日……あの後の事を言った後にね……サトシ、ナルトはこう言ったのよ……？」

（カスミ！サクラちゃんを許してほしいってばよ！サクラちゃんは根っから悪い奴じゃ

ないんだ！ちよつと俺やサトシが落ち着きないから、サクラちゃんもあんなったんだ！だからさ、だからさ！許してほしいってばよ！」

（そうだよ！カスミ、サクラちゃんはオレ達が好きになった子なんだ！それにお前も好きなんだ！だからさ！折角、同じ班になれたんだからよ！女の子同士さ、仲良くなつてくれよな！）

カ「つて言われたもんだからさ……もう誰をかばつて怒つてんのかと思つてんのよつて思つたわよ、それにあの2人は本当にサクラの事が好きつて思つた……それにさらつと私の事もね？だから、もうサクラの事怒つてないの」

サク「カスミ……（ナルト、サトシ……そんな事言つたんだ……変わったなあ……つてあれ!!??私……何かサスケ君の事好きなのに……）」

サクラの心境が変わつた……サクラは心の中で……

サク「（カスミつて大人だな……それに比べて私は何やつてんだろ……何でナルト達は私なんかを好きになつたんだらう……カスミの方が断然綺麗なのに……どうしてなんだろ？）」

カ「もう……サクラ？泣き止んで？可愛い顔が台無しよ？」

サク「カスミの方が可愛いし綺麗だもん……」

カ「え？そうかな？そんな事ないわよ」

カスミはこの世界に来てから、年齢（精神15歳）のせいでもあるのだが、あの調子に乗る所や短気な所は、多少改善されたのである

サク「そんな事あるもん…」

と泣き顔でプクツと頬つぺたを膨らました

カ「ふふツ、可愛い顔で泣き顔見たら、絶対あの2人はイチコロね♪」

サク「…カスミもあの2人の事好きなんじゃないの？」

カ「まあ、そうだけど、私達は基本的にあの2人が決めた人を応援するって事を鉄の掟でがつちり固められてんのよね、まあ…守る気はさらさらないけどね？特にミクが」

サク「あらら（でも、いいなあ、楽しそう…カスミと友達になりたいなあ…）」

カ「うん！サクラも“友達”になったんだから、頑張りましょ！」

サク「え？友達になってもいいの!!??」

カ「何を今さら。だってもう第7班の仲間ですわ！私達2人なんだから！頑張るわよ!!？」

サク「うん！ありがとう！頑張る！」

カ「ふう、もうそろそろ「いぎ尋常に勝負！勝負!!？」来た来た！」

サク「え!?ナルト!?何で？無鉄砲すぎるでしょ!？」

カ「サクラ一回落ち着こう？（◇◇）」「だつて！」：見てて、ナルトは変わったわ、アカデミーの頃よりも少し強くなった：（それ以上にだけど）」

サク「ど、どうして？」

カ「ナルトもサトシも自己紹介の時に言つたでしょ？みんなに認められるような忍びになるって、それでナルトはこれ以上もないくらい修行してんのよ？」

サク「そうなんだ：」

カ「じゃあ、ナルトの戦いぶりを見ましょ？」

サク「うん！」

続く

第9話 演習（後編） 決着の演習

ナルトはカカシに勝負を挑んでいた

カカシ side

ナ「つて言ってみたり」

こいつはバカなのか？とりあえず、カスミとサトシが他の2人に別々に行ったな…
知ってたのか？カスミはサクラと一緒にずっといる、サトシは、断れたのか？別々に別れたな…俺はとりあえず

カカ「あのさ、お前ズレてない？」

と言っておいた

ナ「（うーん、サトシのやつバラしてもいいって言っただけど、じいちゃんが許すか？
…まあどうせ見てるだろうからいいか）はあ…ズレてんのはお前のセンスだろう」

お前つてそれって…

カカ「ちよつとちよつと、お前呼ばわりつてないんじゃないの？」

ナ「（流石にダメだったか、まあいいや。）じゃあ、行くつてばよ!!?…つて何で本

なんか読んでんの？」

カカシ side out

カカ「ああ、いいの、お前程度に本気はいいでしょ？」

ナ「ふーん、後悔しても知らないぞ？」 シュンツ

ナルトがそういった刹那、その姿が消えた、次の瞬間には自分の前に飛びかかるようにして接近していた。手は鈴を取ろうと前へと伸ばしている、急いで飛び退きナルトの手から逃れた。

ナ「チツ、意外に早いじゃねーか…流石だなー、カカシ先生〜」

カカ「何か、雰囲気変わってない？」

ナ「気のせいだってばよ!!?…風遁 大突破!」

と言った瞬間にナルトの口から大きな風が吹かれたのであった

カカ「(何故、こいつがこんな高等な術を知ってるんだ!!??) くっ!!??」

ナ「カカシ先生…本気でやらないと…:…死ぬぜ?」

カカ「!!:…(何だこの殺気は!!??) 下忍以上だぞ!これは暗部の域に達してる!」

…:…いいだろう…:本気でやってやらないでもない(続きは後からだ)」

そう言つて、カカシは持っていた本を懐にしまった

ナ「やっつと本気で来るようになった?じゃあ、サトシ!!?」

サ「おう!!?火遁 豪龍火の術!!?」

突如としてサトシが現れた、高等ランクの術をぶつ放した

カカ「何!!??(サトシの気配が今頃になって現れた?何故だ、さつきまで遠くにいたはずだ!それにこの術は高等ランクの術だぞ!!?)」

サ「油断大敵だぜ!先生!(ナルト少し本気出したか?)」

ナ「そうだってばよく!(ああ:さつきからカカシの心の声がめっちゃうるせーよ)」

サ「(まあ、そうだろう?だってドベNo. 1のお前があれ使ったんだからよ?)」

ナ「(それもそうだな…、本気で行っちゃおう?)」

サ「(いや、ここは一先ず、カスミ達と合流する!サスケに断られたからな?)」

ナ「(やつぱさそうか、じゃあ、早速!)カカシ先生!ちよつとたんま!」

カカ「どうした?」

ナ「俺ら、ちよつと会議してくるってばよ!!?」

カカ「ああ…:そうか?(雰囲気に戻ったぞ?どういう事だ?)」

ナ「じゃ!」ポンッ

サ「バイバイ!」ポンッ

カカ「…:サスケの所に行くか…」

—————

カカシ side

ナルトのやつ……あの動きは下忍の動きじゃなかった、それにあの術も高等ランクの術……何故あいつが使えるんだ……3代目？でも、見張りの時に3代目の所に向かう事すらしていなかった……だが、あの動き……どこかで見た事がある……いや違うな、あんなドベが総隊長なわけが……さて推測はここまでにして、サトシの誘いを断ったサスケはどうでる……

サス「火遁 豪火球の術!!？」

サスケの声がして向いてみる……ほう？……下忍がこの術をするにはチャクラが足りないはずだが……オレは分析しながら、冷静に避け、土遁で土の下へ行きながら考えていた……サトシより気配がだだ漏れだな……いや、今は考えている場合じゃないな

カカ「土遁 心中斬首の術」

サス「ぬおお……」

とサスケを地面に埋めて首だけ見えるようにしといた。ま、本来ならここで首を斬つて終了なんだが……さすがに演習でやるのはちよつとヤバいでしょ。オレは斬らずにそのままにして地上へ行つた。

カカ「忍…戦術の心得その3！忍術だ！まあ、1は体術なんだが先ほど、ナルトが知ってそうだったから言わないよ。ま、お前も下忍になりたてにしては上出来だ！」

とオレはそう言い残してその場を去った。サスケは悔しそうな顔をしている。この戦う前にナルトとサトシの戦い方を見たのかは知らないが…でもあいつらは別だ。特にサトシの気配の消し方については違和感がある。消し方については子供にしては慣れすぎだ…一体どういうことだ？つと、サクラは…カスミとまだいるな、ナルトやサトシの気配も近づいている…合流するつもりか？あの3人は知っているのか？よし…4人で来るなら待つてるか…

カカシ side out

—————

サトシとナルトは、カスミとサクラと合流していた

サ「…カスミ、ちゃんと言った？」

カ「ええ、後、私の独断だけど、サクラにはあの（私達が異世界人って）事をみんなで言おうって思ってるだけじゃない？」

ナ「（お前なあ…暗部ってことはかくせよ？）」

カ「（それは当たり前でしょ？暗部の鉄の掟を破るわけないでしょ？）」

サク「(サトシとナルトとカスミ何の話してるんだろう?) ……これからどうするの？」

カ「あつ、ごめんごめん。今からカカシ先生所に行くわよ？」

サク「え?ど、どうしてなの？」

カ「そりや……………」

勝負しによ♪」

サク「えええええええ!!?!!??」

……………

サク「ねえ…?本当に行くの？」

カ「まだ言ってるの?」「だって!」良いから黙って付いて来て?」

サク「……………わかった。」

サクラはしぶしぶながら納得し、カスミ達の後をついていった

カカシの元に行く間にサトシ、ナルト、カスミは話していた

ナ「それにしてもよく、あのうるさいのを手なづけたな？」

カ「手なづけたってあんたね……ただ友達になっただけよ♪

サクラは私の事何故か、姉さんの感じで見てるけどね？」

サ「お前ってそういう所は鈍感なんだな？」

カ「あんたにそれだけ（鈍感の事）は言われたくなかった……」

サ「（うおい!!??）そこまで言う事ねーだろ！」

ナ「俺も、お前に鈍感って言葉を聞いたくなかった」

サ「（ナルまでか!!??）」

ナ「冗談はここまでにして、どうするんだ？このままカカシのところに行く事なっただけ

ど、もうベルが鳴るまで数十分だぞ？」

サ「（……ああ、それか？別に鈴は取らなくても良いんだ。アレを見せればサスケ以外

のオレ達が合格するからな）」

ナ「（何でだ？）」

サ「（カカシ先生のあの言葉が聞きたいだけの事）」

「（……結局は、サトシの自己満足だけで、サスケは不合格になるんかい!!??）」

サ「(つてのは冗談だよ、この時期のサスケはイタチの復讐だけに生きていたようなものだから、オレ達の事は足手まといとしか見てないから仕方ないけどな)」

カ「(何だ。つてそろそろ着くわね。)」

ナ「(カカシはいるんかね?)」

サ「(行つてからのお楽しみだよ。)」

—————

カスミ達が広場に着くとカカシ先生が本を読みながら待つていた

カ「あつ、カカシ先生く待つてったんだあ〜」

カカ「君達が来るまで本を思う存分読んでたよ」

サ「じゃあ、行くぜ?」シユツ

「!!??」↑サクラ、カカシ

サ「ナルト!」

ナ「おう!!? 螺旋丸!!?」

カカ「何!!?? (螺旋丸!!?? ミナト先生の術じゃないか!!??)」

サク「ええ!!?? 何あの術!!??」

カ「螺旋丸よ…手のひらにチャクラを乱回転させ球状に圧縮し、その球体を相手にぶつけることで相手に螺旋状の傷を負わせながら高速で吹っ飛ばす術なの」

サク「何で、ナルトが!!??」

カ「まあ、それも込みで話すから、私たちも行くわよ!!??」

サク「え!ええ!」

カカ「(やはり、ナルトやサトシは実力を隠してたのか?) お前いつのその技覚えたの?」

ナ「そんな事今はどうだって良いってばよ!!?カスミ!サクラ!行っけ!」

カカ「何!!??」

ナルトがそう言うど何処からともなくカスミとサクラが現れ、カカシの懐にある鈴を取ろうとしていたのだが……

カカ「甘いぞ!サクラ、カスミ!」

カ「くっ……」

サク「後少しだったのに!」

後少しで届く所でカカシが避けたのだった、とその時……

ピリリリリリリリリ!!

演習終了の合図がなった……

カカ「ふう……どうやら時間切れだな?とりあえずサスケを拾って丸太のとこ行くぞ」とカカシは言った。そして一同は最初に集まった丸太の所へ移動した

—————

サトシ side

土遁 心中斬首の術で首まで埋まっていたサスケを拾い、カカシはこう言った

カカ「何で虫の腹が聞こえないのが気になるけどさ、この演習についてだが、ま！お前らは忍者学校に戻る必要もないな」

とカカシ先生が言い終わるとサクラとサスケは喜んでいいる。するとカカシ先生はにつこり笑いながらこう言った

カカ「……そうサスケ……お前は、忍者をやめろ！」

カカシが言い終わるとサスケは驚いている。すると最初にサクラが口を開いた

サク「どうして、サスケ君だけが忍者を辞めなくちゃいけないんですか！」

とサクラは興奮気味に言った、カカシ先生は冷静に冷たく……——

カカ「それはな……こいつは忍者になる資格もねえガキだつてことだよ」

カカシの言葉にイラツとしたのかサスケはカカシに向かって走る。感情任せにする
と忍者にはなれないと知つてる俺達は静かにそれを見続ける…

カカ「だからガキだつてんだ」

カカシはサスケの上に乗っかってサスケの手を拘束している。その様子を見てサク
ラは

サク「サスケ君を踏んじやダメ！」

はあ……これが敵だったら、助けてやれよ、するとその声に対して九喇嘛がイラだつ
たのか、急に

九『うるさいぞ!!？小娘が!』

「（九喇嘛のバカ!!？）」「」

と俺たちは心の中で突っ込んだ：このいきなりの声に驚いたのかサクラ、サスケ、カカシ先生までもが驚き、ナルトを見る、まあ当たり前だな？だってナルトの中に九喇嘛がいるんだから声の発生源はナルトの腹の中からだ

ナ「……九喇嘛のアホ。」

とナルトは、呆れながらも九喇嘛が何を言うかを聞き耳立てていた

カカ「（今のは間違いなく、あの九尾の声！）」

サク「……今のは、ナルト？」

とサクラは少々驚きながら聞いていた。

サス「……お前の声にしては低かったぞ？」

サスケはそう聞く

カ「……九喇嘛落ちて着いて？後、ここ一番にうるさかったのは九喇嘛だからね？」

とにつこり笑ってカスミは言っていた：半ギレすんなよ、カスミ：

九『だが、カスミ……ってここにいっても話しくい！』

ぼんっ

と言いながら、急に煙が出てきてオレンジ色の髪を持ち俺らより年上の大人が現れた、無論、人型になった：九喇嘛だ。

サク「えっ、誰ですか？」

九「わしの正体などその坊主に聞けばわかるわ！ 貴様ら忍者をなめているのか!? 何のために班を作りチームごとこの演習やってると思ってるんだ！」

サス「チツ、どういう事だ！」

九「ふん！ そんなもんその坊主に聞けばわかる。わしは寝る！」

「（出てきたと思ったらもう寝んのかい!!??）」

九喇嘛はそのままナルトの腹の中に戻っていった、はあ：嵐が通り過ぎたみたいだぞ？

カカ「……まあ、つまり……お前らはこの試験の答えをまるで理解していない……」

サス「何だそれは！ もつたいぶらずに早く言え！」

とサスケが聞き返す。だから逆切れやめよ？ 聞いてる方が腹立つ、それにカカシ先生オレ達（一応）の上司なんだからさ。カカシ先生は呆れて言った

カカ「それはチームワークだ」

その言葉にサスケはハツとする。ナルトやサトシ、カスミの方を見ると驚いてなかったのどうやらナルトでも分かっていたみたいだ。

サス「だが鈴が4つしかないのにチームワークなんだ！5人で鈴を取ったとしても仲間割れするだけじゃないか！」

とサスケは反論する。それに対してカカシは答える

カカ「当たり前だ！これはわざと仲間割れするように仕組んだ試験何だからな!!？」

サク「はっ（だからカスミは私を誘ったんだ…でもどうして知ってたんだらう。あとで教えてくれるって言ってたし…うん！）」

サクラとサスケはそれを聞いて驚く。俺は仕方ないかと思いつた

サ「この試験は誰か忍者学校に戻るのを1人我慢しなきゃならない…逆に言えば仲間のために自分が犠牲になるのを望むことができる人…その人こそが合格できる人だったんだよ」

と俺はそう言った

カカ「そうだ。そして最初の開始直後に皆で集まり5人でかかってこればオレから鈴を取ることができたはずだ。いくらオレでも5対1じゃ分が悪すぎるからな」

とカカシ先生は言った…そしてその言葉にサスケは凶星になる。

サ「だからオレはお前を誘ったんだ。一緒に鈴を取りに行かないかと。でもお前は断った。まあ予想はしてたけどな」

俺の言葉に何も言えないのかサスケは黙ったままだった。

カカ「それなのにサスケ！お前は誘いを受けておきながらサトシや他のメンバーを足手まといだと決めつけて個人プレイ！下忍がやるにはチャクラが少ない豪火球の術をオレにした。情に流されては忍はやっていけない！よく覚えておけ!!？」

とカカシ先生はそれだけ言うとなルト、カスミ、サクラに向かつてこう言った

カカ「お前らは、最初のナルトの無鉄砲さ（それとあの速さ）には驚いた…だが、もつと驚いたのがお前らの最後連携プレイだ…ちゃんとチームワーク出来たな、それに身体能力もアカデミーの時より上がったな…慢心せずにさらに腕を磨け。そうすればもつとお前らは強くなれる」

とカカシ先生は言ったー…

カカシ先生…ごめんな。まだアレ以上に動けるんだ…それに慢心何かするもんか…木の葉の守護七神の俺らが慢心するわけねー世界は、広いんだ…

カカ「任務は班で行う！たしかに忍者にとつて卓越した個人技能は必要だ。がそれ以上に重視されるのは“チームワーク”」

ナ「確かに一人一人の技術は良くてもチームプレイがクソだったら話にならないってばよ」

ナルが珍しく正論を言った

カカ「そうだ。チームワークを乱す個人プレイは仲間を危機に落とし入れ殺すことになる。……例えばだ：サクラ！カスミを殺せ、さもないとサスケが死ぬぞ!!？」

とカカシ先生はサスケの首にクナイを当てて言う、サクラは何も出来ずただジツとしてしまっている：それは命取りだぞ？

カカ「：とこうなる。人質を取られた挙げ句に無理な2択を迫られ殺される。任務は命がけの仕事ばかりだ！」

カカシはそう言うとかナイをしまつて、サスケから離れる。そしてサスケは立つ。

カカ「ちなみに敵はオレたちに情などかけない。もしサクラがカスミを殺したとしても敵はサスケを殺してサクラも殺す。」

とカカシは冷徹に言い放った。その言葉にサクラとサスケはビクツとした。一応捕捉に私は二人に説明する。

カ「当たり前だよ？だって里に帰られて言われたりしたら私たちが何を知らうとしたか場合によっては分かられるし。そんなんだったらその場で皆殺しちやえば誰にも何

にも分からないから一件落着だよ」

サクラはそれに疑問を感じたのかカスミに質問をする。

サク「どうして里に帰られて言われたらあたしたちの目的まで分かられちゃうの？」

カ「え？うーん、例えばさ私らはA国の暗号を入手してこいと命令されたとするね。じゃあまず何をやる？」

とカスミはサクラに聞く

サク「え？そりゃあ、A国に行つて暗号部の人を探すわよ……」

とサクラは答える

カ「そうするにはまず、暗号部の人は誰かと、暗号部の拠点を探さないといけないよね？となればまずA国の住人や忍に尋問したりするけどその人を殺さずに置いとくと、その人たちはA国の長に報告するよね？」木ノ葉の忍が暗号部の人や暗号部の居場所を答えろと尋問された“”って。そうすると長は木ノ葉はA国の暗号を手に入れようとしてるってすぐ分かるってこと」

とカスミは答える

ナ「そうすれば、A国の長は木ノ葉の目的を考え対策を練る。するとA国も黙つたままではいけないから攻める対策を練つたりして気づけば戦争だつてばよ……」

とナルトは言う。サクラは納得した様子だった。

カカ「そういうことだ。現にお前らはそういう道を歩もうとしている。尋問する立場やされる立場になることもある。これを見るこの石に刻んでいる無数の名前。これは全て里で英雄と呼ばれている忍者たちだ」

とカカシ先生は慰霊碑に向かって歩いて行く。

原作だつたらここでナルトがKY発言するんだよなあ

ナ「それぞれ！俺はそういう英雄になりたいんだってばよ!!？」

言っちゃったよ、まあ俺が目で合図して言わせたんだけど

カカ「…がただの英雄じゃない…。任務中に殉職した英雄達だ」

ナ「え？」

とカカシ先生は静かな声でそう言った。

カカ「これは慰霊碑。この中にはオレの親友の名も刻まれている……………」

とカカシ先生は慰霊碑を見て言う。……オビトのことか。けど残念ながらオビトは黒幕なんだよね、ここにはミナトさんやクシナさんの名も刻まれてんだよな

カカ「最後にもう一度チャンスやる。ただし昼からはもつと過酷な鈴取り合戦だ！挑戦したい奴だけ弁当を食べ。ただしサスケには弁当を食わすな仲間のことを見下した罰だ。もし食わせたりしたらそいつをその時点で試験失格にする。ここではオレがルールだ分かったな？」

カカシ先生はそう言うと言えたでも後ろの木のところに気配を消して隠れてる。気配だだ漏れだぞ？まあしやあないか。サスケのお腹が鳴る。しやあーねえな…

サ「これやるよ」

俺は弁当をサスケに渡す

サス「…何のマネだ」

とサスケは言う

サ「お前、カスミの弁当食つといて、腹減るつてすごいなつてのは冗談で腹減つてんならやる。」

と俺は冗談を言いながらサスケに弁当を強引に渡した。

サク「ちよ、ちよつとサトシ！さつきカカシ先生がダメだつて！」

とサクらは言う

サ「俺は次こそみんなで鈴が取りたいんだ、それに次は一緒に戦つてくれるつて信じてるんだ。それに俺やナルトは朝飯食つたから良いんだ。だからやる」

と俺はぶつきらばうに笑いながら言った

ナ「オレもするつてばよ。サトシ、オレの弁当やる」

とナルトは俺に弁当を渡す

サ「お前なあ」

と俺が呆れながら聞き返すとナルトは「オレってば倒れても九喇嘛がいるしな！」とナルトは笑って言った

サク「：しよやうがないわね！サトシ、あたしの弁当半分わけてあげるからソレナルトに返しなさい」

とサクラは弁当を半分に分けて言った。

カ「じゃあ、サクラに私のをあげるわ」

サク「あつ、ありがとう！

そして皆で仲良く弁当を食べた。

「お前らああああ！！？！！？！！？」

とカカシは叫んでこつちへ来る

サク「きやああああああ！！？！！？」

とサクラは叫び、サスケは焦った顔をし、俺とナルト、カスミは平然としていた
「イーかつく♡」

とカカシはにつこり笑って言った、ハートをつけてたのがイラツと来たけど

サク「え？何で!!？」

とサクラは聞き返す

カカ「お前らが初めてだ。今までの奴らは素直にオレの言う事を聞くだけのボンクラどもばかりだったからな、忍者は裏の裏を読むべし……」

と一旦切ったカカシ先生

カカ「忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされるけどな！仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだ」

とカカシは答えた。やっぱ、オビトの言葉はカカシ先生の心に残ってんだな…

カカ「これにて演習終わり全員合格!!よーし！第七班は明日より任務開始だ!!」

とカカシ先生が言い終わると皆で弁当を食べて、演習場を離れた。

第10話サクラに教えられる明かされし真実！

演習が終わって数日が経った休日、カスミはサクラをある場所へ連れて行っていた。

サク「ね、ねえ、カスミどこに行くの？」

カ「まあ、まあ、黙って着いてきて♪」

サク「う、うん。」

カスミは、サクラにあの事（自分たちの素性など）をみんなと話す為に、死の森へと向かっていったのだ。

死の森

サク「ここって、立ち入り禁止の場所でしょ？ いいの入っても。」

カ「いいの、いいの！ ヒルゼン様の許可はもらってるしw」

サク「え!？」

サクラは驚いていた、何故三代目は、カスミのような下忍にここの立ち入りを許可しているのかと。

カ「じゃあ、入るわよ。みんな待ってるから。」

サク「みんな?」

死の森奥地

カ「みんな♪」

連れてきたわよ。」

ナ「カスミ、ほんとに連れてきたのな?」

カ「あつたりまえじゃない! サクラには知ってもらいたいもん♪」

サ「まあ、それも面白いけどなw」

サク「カスミ: 何でみんながここにいるのよ。」

サ「こつからは俺が説明する。」

俺とカスミ、ハルカ、ヒカリ、ミクの素性についてだ。」

サク「す、素性って?」

サ「まあ、単刀直入に言うとな俺らはこの世界の人間じゃねえんだよ」

サク「え、えええええ!? ど、どういうことよ、あんた達孤児でこの里に住んでるって

!

サ「それは、じつちゃんに頼んで俺らの事をそうしてくれて頼んだんだ。知ってるやつは、ここにいる奴らと三代目火影だけだ。」

サク「そ、そうなんだ。いのにシカマル、チョウジがここにいる理由もわかった。でも何であんなに強いのか？」

ハ「まあ、それは、この世界が忍びの世界って知ってたから、三代目に修行をつけてもらったのよ♪」

サク「なるほど、ナルトやいの達はどうして、知ったのか？」

ナ「俺が最初に見つけたんだってばよ！」

困ったから、じいちゃんのとこに連れてったんだってばよ。」

い「私は、三代目から話を聞いた。パパから聞いたの、シカマルやチョウジも一緒（他の事もだけど）」

サク「そういうことだったのね…サスケ君やカカシ先生には言わないのか？」

サ「今は、な。サクラちゃんにしか話せなかった事なんだ。カスミが言ったしな（？）？」

カ「う、だ、だってサクラがあまりにも可愛かったから…てへ（>▽<、）ゝ」

ヒ「はあ…カスミは可愛いもの好きだしね…（水ポケバカだけど）」

ハ「そうかもw」

あの時だって、可愛いからって猫を持ち帰って来た時はびっくりしたわよ（水ポケバカだけど）」

ミ「そうそうw

サクラ確かに可愛いもんね〜食べたいくらい（*?、*）」

サク「ちよ、ミ、ミク!？」

「「あなたが言うのと本気に思われるからやめなさい!!」」

ミ「そ、そんな3人同時に言わなくても…（・・ω・・）」

サ「今のはミクが悪いな（悪気なし）」

ナ「んだな（こちらも）」

ミ「ひっどーい！」

サク「ぶっ…（*^□^）ハハハハハハ!!!!

面白い〜いつもこんな感じなの？」

ミ「いつも私いじられキャラなんだよ〜」

ハ「いつもこんな感じなのw」

サク「うんw面白い!とってても…」

カ「ん?どうしたの?急に黙って。」

サク「ううん…アカデミーの時なんでもっと、仲良く出来なかったのかなって。」

アカデミーの時は、サスケ君の彼女になりたくて、いつも私のそばばかり来るナルト

やサトシをウザくて、邪険ばかりしてて、カスミやハルカ、ヒカリの言ってることが全くわかつてなかった「サクラ」カスミ?」

カ「それはもう許したって言ったでしよ?」

い「サクラ、それはもう許されたじゃない。」

サク「でも!」「サクラちゃん!」「ナルト?」

ナ「サクラちゃん!俺もサトシも全然気にしてないってばよ!そりや邪険ばかりされて落ち込んだ事あるけど、サクラちゃんをそんなに夢中させる、サスケには負けねえって思つて修行もしたんだぜ?結果はまあ、どべのまんまだったけど、それでも俺達はサクラちゃんの事が好きなんだってばよ!何が言いたいのかわからなくなっちゃったけど、サクラちゃん、そんな落ち込まなくてもいいんだってばよ!」

サク「ナルト…:ありがとう:」

サ「(たまにはいい事言うじゃねえか)」

ナ「(たまにはってなんだ、たまにはって、ああでも言わなけりやサクラ落ち込んだままだろう)」

サ「(ツンデレなナルちゃん可愛い (あ?))」(気の所為って事で)」

カ「(そこバカふたり早く戻って)」

「(。(。)) / ういゝいゝす)」

サク「くくく」

い「落ち着いた？サクラ」

サク「うん…」

サ「じゃあ、これにて解散！」

シ「なんていうか、サクラよかったな。」

サク「シカマル…ありがとう」

チヨ「サクラくよかったね」

サク「チヨウジ…」

こうして、サクラはサトシ達から（暗部のこと以外を）話をきいたのだった。

そして…

夕方の帰宅時にサクラはいのに

サク「いの…」

い「ん？」

サク「いのって、サトシとナルトが好きなのよね？」

い「そうよ♪」

あの2人も性格最高だし、可愛いし、すべていいからね」

サク「じゃあ、今度からライバルね？」

い「え？ら、ライバル…つてあんた、まさか…!?」

サク「私もあの2人好きになっちゃった♪」

い「えええええ!!?」

どうやら、またもやサトシ（とナルト）の一級建築士はこの世界でもフル活動のよう
だ。

い「嘘でしょおおおおおおお!!!」

続く

第2章 波の国の勇者

第11話波の国編開幕!だが、序章なり!

サクラの宣言から数日が経ち……
ガサツ

『そっちはどうだ?』

「こっちはOKだつてばよ!」

「ナルト、もうちよつと声下げなさい。逃げられるでしょ?」

ナ「う、わかつたつてばよ、サクラちゃん」

「ウスラトンカチ、ハマするなよ。」

ナ「そんなことわかつてるつてばよ。サスケ、サトシそっちどうだつてばよ。(影分身に変わっていいか?)」

サ「こっちは来てない。カスミ、そっちは? (何言つてんだ、バカ!これやらないとあいつらに会えねんだ。ちゃんとしろよ。)」

ナ「(へいへい)」

カ「こちらも異常なし」

サス「こちらサスケ：目標発見、サトシの方に向かった。」

サ「了解!!？」

カカ『いいか。無事を確認して確保するんだぞ。』

サ「了解。」

………

サ「捕まえた！」

サク「やった!!？」

サス「ふん、ウストラトンカチがよくやったな。」

ナ「やったってばよ！ついでにえええ!!？」

カ「やったね！」

サス「こちら、サスケ。無事に確保した。」

カカ『左耳にリボン：目標のトラに間違いないか？』

サ「間違いないぜ！」

ナ「そうだってばよ！」

カカ『よし、迷子ペット “トラ” 捕獲任務終了！』

戻ってこい。』

「「了解!」」

「ああ!私のかわいいトラちゃん。死ぬほど心配したのよオ〜〜」

「「「……………」」」

カ「逃げんのも無理ないわね、アレじゃ」

ナ「(ぜってえ俺だったらぶっ殺す)」

サ「(落ち着け、バカ)」

ナ「(へいへい)」

するとイルカが……

イ「…さて!カカシ隊第7班の次の任務はと…

んー…老中様のぼっちゃんの子守に、隣町までのおつかい、イモほりの手伝いか……」

サ「ナル…」

ナ「へいへい、このキャラにも疲れんぞ。」ダメー…ツ!!そんなのノーサンキュー

!!

オレつてばもつとこう、スゲエー任務がやりてーの!他のにしてエ!!!

サ「俺もやるから」確かに!ランクがもつと上なのしてえーよ!」

カ「私もやるし!」そうだよ!火影様!」

イ「何言つてんだ!お前らはまだペーペーの新人だろうが!

そんなのやらせられるか!」

ナ「イラツ」

サ「認めた相手にイラツと来んなバカ」

ナ「あんな言い方されちゃーキレかけるわバカ」

サ「うるさいバカ」

ナ「(んだとバカ)」

カ「(あんた達バカバカうるさいわよ!)」

「(ウツ、ごめん)」

カ「(よろしい!)」

「(どこのオカンドよ!?!)」

カ「(このオカンよ)」

「(なわけあるか!!?)」

と何かわけのわからないのよミニコントをやっている3人をほつとき話は続き

「(ほつとくな、駄作者!!)」

もう…地の文字に反応しないでよ。話は続き!!

イル「お前にも1回説明しないといけないな!

いいか…任務というのは難易度が高い順からA・B・C・Dと分けられていてから

…」

ヒル「もう良い…イルカよ」

イル「ですが三代目…」

ヒル「ここにちやうどCランクの護衛任務がある

それをカカシ班に任せよう」

サ「(よっしや、来た!)」

ヒル「では入って頂きますかな」

タズ「なんだあ…超ガキばっかりじゃあねえかよ」

ナ「(何か変な酔っ払いじじいが入ってきたぞ。)」

タズ「…特に、その一番ちっこい超アホ面。お前それ本当に忍者かあ?!お前エ!」

「「「「はい」おう」」」」

そして、時は過ぎ……やっぱり遅刻魔カカシ先生は遅れていた。

カカ「ごめんな。おばあちゃんが道に迷っててな」

「「はい!それ嘘!」」

タズ「あいつはいつも遅いのか?何か慣れてるみてーだが?」

カ「あはは……カカシ先生が遅刻してる理由一応知ってるんですけどね?

さすがに遅すぎますよ。カカシ先生!」

カカ「ごめん、ごめん!じゃあ行こうか!」

「「「「はい(おう)」」」」」

続く

第12話いざ、波の国へ！ちよつといざござあり、新たな展開が!?

ナルト達、第七班+αは波の国を目指していた。

サク「ねえ、タズナさん」

するとサクラがタズナに訪ねていた

タ「なんだ？」

サク「タズナさんの国って【波の国】でしょ？」

タ「それがどうした？」

サク「カカシ先生！」

カカ「ん？どうしたのかな？」

サク「波の国には忍っているの？」

カカ「いや、波の国に忍者はいない。∴が、大抵の他の国には文化や風習こそ違うが、隠れ里が存在し、忍者がいる。大陸にある沢山の国々にとって、忍びの里の存在するのは、その国の軍事力にあたる、つまり、それで隣接する他国との関係を保つてるってわけだ。ま！かと言って里は国の支配下にあるわけじゃなくて立場は対等なんだ。波の国のよ

うに他国の干渉を受けにくい小さな国は、忍びの国が必要でない可能性もあるし、それ
 ぞれの国の中でも、特に、火・水・雷・風・土の5ヶ国は国土も大きく力も絶大なため、
 忍五大国と呼ばれている。火の国木ノ葉隠れの里・水の国霧隠れの里・雷の国雲隠れの
 里・風の国砂隠れの里・土の国岩隠れの里各隠れ里の長のみが影の名を受け継ぐことが
 出来、その火影・雷影・風影・土影、いわゆる五影は全世界各国何万の忍者の頂点に君
 臨する忍者達だ。ま…安心しろ、Cランク任務で忍者対決なんてしやしないよ。」

サク「火影様つてそんなにすごいんだ! (あんなしよぼいじいさんが?)」

カカ「お前…今火影様を疑つたら?」

サク「Σ(∥o∥;) ギク!! (なんでわかるの!?)」

ナ「…お前は、火影様のホントの意味を知らねえからな」

サク「え…?今の…ナルト?」

ナ「ん?どうしたってばよ! サクラちゃん!」

サク「あつ、いや、なんでもない (今ナルトが言ったんじゃないの?)」

しばらく、歩いて行くと…

サ「(あつ、あつたぞ。いかにも怪しい水溜り)」

カ「(案の定カカシ先生以外は気づいてないわね)」

ナ「見るからに、怪しいのにな。サクラを調べケンゲン鍛えとけよ。カスミ」

カ「あんたはサスケをお願いよ？ どうせバラすんだから、ね？ サトシ」

サ「ああ、でも波の国編での『最初』の任務だ、それにあの二人は必ず助ける。」

ナ「そんなにつえーのか？ その2人は」

サ「まあ、再不斬はカカシ先生と互角かそれ以上の実力があつて、白は血継限界だから、強いな、NARUTOの最初期の敵としてはな」

カ「(波の国編では、サスケは写輪眼、ナルトは自分の忍道、サクラはまだ何もだけど、タズナさんを守ってたからね。それに今回は私達が居るし。)」

ナ「まあ、そういうのはお前らに任すわ。」

「(ええ(ああ))」

ナルト達が話している間に水溜りを通り過ぎたその刹那…

シュツ、ザシュザシュツ！

カカシに無数のクナイや手裏剣が飛んできて、刺さった。

サク「えっ…？ カカシ先生……！」

sideナルト

カカシが、無数のクナイに刺されたその時サクラが、叫んだ。

こいつらも背後から奇襲をかけるんなら、殺気くらいは出すなよなダダ漏れだ。

お、こつちに来やがった…

俺の背後に移動した奴らから、声が聞こえた

「まずは1匹。お前で2匹目」

ブチッ

ナ「誰に向かって〴〵匹〴〵って言ってやがる。」

俺は、思わず、素でそう言ってしまった。あいつらが来てから短気なのはなくなったと思つたが、流石に匹呼ばわりされれば、キレたくもなる。

「フツ、お前だ。すぐに楽にしてやる。」

と忍者Aがそう言ってきた。

ナ「自分が強く思うのはそれでいいが…おめーじゃ俺にはかなわねーよ。」

「何?」

俺は、目の前のこいつに、風遁被せた、クナイを足元に投げつけると同時に見えない速さで懐に入り、そのままそいつを気絶させた。

「何だと?!」

サク「ナ、ナルト?! (何!?今の動きや早さ!?)」

サス「何…!! (ウストラトンカチがあんな動きを!?俺でさえ見えなかつた)」

サ「(あのバカ…)」

カ「(うわあ、完全にキレちゃってるなあ)」

みんな、俺の動きや速さを見て、驚く者、呆れる者に分かれた。それもそうだな。ってサトシの野郎後でのたす。

ナルト side 終了

サトシ side

ナルトが、思わずキレて、倒した一人を見たもう一人は俺の方を見た後。

「あいつはやられたが次はお前だ。」

と言いながら、走ってきた。

サク「サトシ！危ない！」

サクラが叫んだ後に俺は：

「何だと?!」

相手の後ろにナルトと同じ速さで行きそのままそいつを気絶させた

サク「サトシ!?(嘘!?)サトシまであんな動きを!?(?)」

サス「くっ…(どうなってるやがんだ!)」

ナ「(おめーも言えねーじゃねーか)」

カ「(はあ……)」

みんな、それぞれの反応を見せたと、いつの間にか出ていた、カカシ先生にサ「カカシ先生、こいつらどうします?」

カカ「え? あつ、そ、そうだな。とりあえず縛って置いてくれ」

カカシ先生、あんたは仮にも上忍なんだから狼狽えんなよ……

サ「了解」

敵の二人をグルグル巻きにして放置しておくそして、

カカシが敵から何かを聞いているのを、少し離れた所で見てる俺達……お、戻ってきた

カカ「タズナさん、お話があります。」

タズ「な、なんじゃ?」

カカ「あなたの隠している事を教えていただきたい。」

タズ「わしは、そんなことは……すまん。」

サク「先生? 隠していることって?」

カカ「今回の依頼内容はギャングや盗賊などの武装集団からの護衛が、受けた内容だ。

忍者が出てくるとは聞いていない」

タズ「……」

カカ「これだとBランク以上の任務だ。何か訳ありみたいですが、依頼で嘘を言われると困ります。これだと我々の任務外つてことになりませぬ」

サク「この任務はまだ私達にははやいわ…やめましょう」

まあそうなるよな、忍者にとつて情報は命を左右する物だし、それを意図的に隠すとかはありえないだろうな、でもあるタズナさんの話を聞いたら…

タズ「先生さんよ、話したいことがある。依頼の内容についてじゃ…あんたの言う通り、おそらくこの仕事はあんたらの任務外じやろう。実はわしは超恐ろしい男に命を狙われている」

カカ「超恐ろしい男…誰です？」

タズ「あんたらも名前くらいは聞いたことがあるじやろう。海運会社の大富豪、ガトーという男だ！」

サク「え…？あのガトーカンパニーの!?!世界有数の大金持ちと言われる!?!」

タズ「そう…表向きは海運会社として活動しとるが、裏ではギャングや忍びを使い、麻薬や禁制品の密売、果ては企業や国の乗っ取りといった悪どい商売を生業としている男じゃ。一年ほど前じゃ、そんな奴が波の国に目をつけたのは。財力と暴力をタテに入り込んできた奴はあつという間に島の全ての海上交通・運搬を牛耳ってしまったのじゃ！島国国家の要である交通を独占し、今や富の全てを独占するガトー…そんなガトーが唯

「一恐れているのがかねてから建設中のあの橋の完成なのじゃ!」

サク「なるほど。で、橋を作ってるおじさんが邪魔になったってわけね」

サス「じゃあさっきの忍者たちはガトーの手の者ってことか」

サクラとサスケは何か納得してゐるみたいだな、長々と話しているが・・・どうでもいいから、先に進みたい・・・

タズ「波の国は超貧しい国で：大名ですら金を持ってない。勿論わしらにもそんな金はない!高額なBランク以上の依頼をするような：まあ、お前らが任務をやめればわしは確実に殺されるじやろう。だが、なあに、お前らが気にすることはない。わしが死んでも、10歳になる可愛い孫が一日中泣くだけじゃっ!」

あつ、カカシとサクラが困ったような顔してるし、平然としてるのは俺とサスケとナルトとカスミぐらいか

タズ「あつ!それにわしの娘も木ノ葉の忍者を一生恨んで寂しく生きていくだけじゃ!いや、なにお前らのせいじゃない!」

恨みね。ちよつとダークな俺を出してみるかなあ。

サ「なあ、タズナのおつちゃん。なんで俺らが、あんたの娘に恨まれないといけないんだ?」

「「えっ!?」」

俺の言葉にみんな（ナルトとカスミ以外）の顔がかわった

サ「あんたに力が無くて自分自身を守れないのも、あんたの国に金がなくて任務を依頼できないのも、何で俺達のせいになるんだよ」

タズ「……………」

サ「なんでそれで、俺達が恨まれんだ？教えてくれよ、タズナのおっちゃん」

タズ「……………」

タズ「あんたは知ってるのか、人から恨まれるって事がどれだけ重いのか…その重さも知らないくせに、簡単に恨むなんて言葉を使ってんじゃねえ!!」

そろそろナルトやカカシ先生にでも、口を挟みそうだからダークな俺はここで終了だな。

タズ「確かに、わしの言葉が悪かった。許してくれ、この通りだっ!」

そう言ってタズナは頭を下げてきたマジかよ、カカシ先生が止めに来ると思つてたのに

タズ「わしを、わしの家族を、わしの国を、助けてはくれないだろうか。頼む」

タズナのおっちゃんは、深く、深く、頭を下げた。

カカ「サトシが言いたいことはよくわかった。だからもうやめておけ、タズナさん、頭

をあげてください。

カカシ先生、止めるの遅いって、せめて、タズナのおっちゃんをこれをする前に止めてくれよ。

サ「タズナのおっちゃん、ごめん!ちよつと頭が上がっちゃって。」

タズ「何、わしが軽はずみなことを言ってお前を怒らせたんじや、わしが悪い。

お前さんは気にせんでいい。」

カカ「では、私達も乗りかかった船ですし、このまま護衛を続けますよ。」

タズ「ああ、よろしく頼むよ、」

キヤラ変わりすぎだろ。まあ、いいか。つとその前にだな。

カカ「とその前に、ナルト、サトシ聞きたいことがあるんだけど?ちよつといいかなサスケ、サクラ、カスミはタズナさんの傍にいてくれ」

「「わかった(わかりました)」

すると、カスミたちちよつと離れたところでカカシ先生先生が

カカ「お前らに聞きたいことがある」

「「どうしたんだ(つてば)?」

カカ「お前らもこの世界に来ちやったの?」

「「……………は?」

いや、
どういふことだよ!?

続く。

第13話 新たな展開!畑カカシは、逆行者?!

サトシ side

カカシ先生にそんなこと言われて、俺達は、素で言ってしまった。

カカ「え?違うの?」

サ「いや、俺らはさっきの事を聞かれると思ったしさ。」

ナ「一瞬何が言いたかったのかわからなかった。」

でも、今のカカシ先生の言い方からすると…

サ「まさか…カカシ先生って逆行してる?」

すると、カカシ先生は驚愕して

カカ「さっき、言っただけで、なんで分かっちゃうの?」

サ「いや、今の言い方からしたら、そうかなあつて思ってたな!」

カカ「なるほどね。それで君達は、違うようだけど、どうなっちゃってるの?」

サ「ああー、多分この世界は、カカシ先生の時間軸とは全く違うと思う。でも、俺の

事やカスミの事がわかるって事は俺達はそっちの時間軸にも来てみたいだな……」

カカ「え？それってどういう事なの？」

サ「これ知ってるのは、猪鹿蝶のみんなと火影様とナルトしか知らないけど、俺とカスミやハルカ、ヒカリ、ミク、シゲル、タケシは、この世界の人間じゃないんだ。」

カカ「え!?!俺の時間軸では、お前らは親も姉とかも居たんだぞ!?!」

サ「そういう事か……やつぱり、カカシ先生はパラレルワールドから来たみたいだな。」
ナ「みたいだな。」

カカ「つて、そういうえば、お前らは逆行者じゃないことはわかったが、なんか性格が違くない?」

サ「まあ、そりやそうだろうなく、こいつは、暗部の総隊長だしなあ」

カカ「……!?!そこまで違うのか!?!」

サ「うん、じゃあ、こっちが質問するけど、いつここに?」

カカ「ああ、この波の国に来る前だな」

サ「ああー、なるほどなあ。でも、こっちとしてはありがたいや!」

カカ「なんだ?」

サ「白と桃地再不斬を助けられるって事ができるからさ!」

カカ「そうか、今は波の国へ行く途中だから、あいつらがいるのか。」

でも、助けた後はどうするんだ？」

じゃあ、言うか、助けた後のことを！

サ「もちろん、木の葉の忍にさせるんだよ！」

カカ「そんな事が可能なのか!？」

サ「そりゃ、じいちゃんは事情知ってるからね。それに戦力強化のためにね！」

カカ「なるほどね。前の世界とは事情が違うわけなんだね。」

サ「うん!後、うちは一族は滅んでないからね?」

俺は、カカシ先生にその事を伝えたと：

カカ「何だと!?!それは本当なの！」

「俺らで、それをしなくした。」

サ「だけど、表面上は滅んでるって事にしてる、カカシ先生だって逆行者なら、わかっ

てんだろ?」

カカ「あ、ああ、驚いたな、そこまで違うのか。」

サ「でも、こつちだつて驚いてるよ、そっちの世界では俺達は転生者じゃないって事

が」

カカ「ああ、つて事は、カスミも事情知ってたのか。」

サ「後で伝えとく、カカシ先生は六代目火影になった時代なの?」

カカ「そこまで知ってるのか、転生者ならそれもそうか。そうだよ。俺は六代目火影になって、そしてナルトに7代目を継がせてから隠居生活の末に、寿命で死んだ。」

サ「なるほどね。それで気づいたら、墓の前に居たわけなんだね？」

カカ「ああ、それでイルカに聞いたらナルト達がタズナさんとまっつてますよ！つて言われて、ああー波の国へ行こうとしてるんだなって思ったんだ。」

サ「そして、俺とナルトのあれを見て俺らもここに来たんだって勘違いしたってわけか。」

カカ「ほんとにびっくりしちゃったよ。」

ナ「まあ、その話はじいちゃんも含んで話そーぜ？今は、この任務を終わらせてからだ。」

サ「それもそうだな。じゃあ、カカシ先生」

カカ「わかってる。俺は再不斬に手加減してやれつて言ってるんだろ。」

サ「流石は、六代目火影様、わかってる。よろしくねー」

カカ「おう」

俺達は、話が終わり待たせていた、カスミ達と共に波の国へ向かうのであった。

サ「カスミ、カカシ先生が」

「…事になった。」

カ「(すごい展開ね。)」

サ「(俺もびっくりだよ…まさか、カカシ先生が逆行者だっというのが)」

ナ「(憑依逆行って言うのは初めて見たな。)」

サ「(確かにな。まあ、波の国は楽になるな。)」

「(ええ(ああ))」

続く。

第14話 桃地再不斬と決闘！

サトシ side

俺らは、タズナのおっちゃんの友人の手引きでタズナのおっちゃんの家まで川を跨いでいた。

もうすぐ、あいつが…あいつらが…来る。…桃地再不斬が…白が…

カカ「みんな！伏せろ！」

ついに来たか…

カカシ先生の合図で俺達は全員伏せる

飛んできたのはとんでもなく長い刀『首切り包丁』だった。

サ「（この場面見た時、俺ほんとに危ねーって思ったんだよな）」

ナ「（…首切り包丁か）」

カ「（うわあ、実物やっぱでかいなあ）」

カカ「（…ここまでは、俺の世界と一緒か…）このままじゃ、ちときついか。」

再「写輪眼のカカシと見受ける…悪いがじじいを渡してもらうぞ」

この場面がなかったら、俺はカカシ先生はただの遅刻魔先生だと思ってた、だが、こ

れを見たらカカシ先生はほんとに強かった、とサスケの方は…

サス「(写輪眼だ?!)」

やっぱ、驚いてるよな。うちは一族しか持たない血継限界をカカシ先生が持つてるんだからな。

カカ「みんな、卍の陣だ、お前達は戦いに加わるな。それがここでのチームワークだ！」

やば、このまま戦わせるわけにはいかねー

サ「(ナル!止めるぞ!)」

ナ「(お、おう)」

サトシside out

第三者side

「ちよつと待った!!」

カカ「へ!?何、なんなの!?!」

ナルトとサトシが待ったをかけカカシ先生つんのめってしまった

サク「え?ちよ、ちよつと!ナルト、サトシ!?!何止めてんの!?!」

サス「(・皿・) チツウスラトンカチ!何やってやがる!」

タ「いったいどうしたんじゃ!？」

カ「…」

二人の行動に驚愕の表情をする他のみんな（カスミはこれから何が起きるかわかるから、神妙な顔である）

「再不斬の兄ちゃん!」

再「なんだガキども」

サ「俺たち、あんたに会いたかったんだ!俺達の話聞いてくれ!

俺達は、再不斬の兄ちゃんがこの後どうなるか知ってるんだ!

ガトーのやつは兄ちゃんを裏切るつもりなんだ。

俺達はあると戦いたくねーし、死なせたくない。だからさ!

木の葉の里に来ないか!

「はっ!?!」

サクラ、サスケ、タズナが何を言ってるんだという顔をしていた。

カカ「戦ってから、じゃないのね?そういう事は言っただけじゃなかったよ」

カ「カカシ先生、ごめんなさい、あの二人とういかサトシはこうと決めたら即決行的な感じなのよ。ナルトはまあ、付き合わされてるって感じかな?でもこれは火影様も知ってる事だから、大丈夫」

カカ「はあ、まあいいか動向を見よう」

諦めたように、カカシはサトシ達の動向を見守った

サ「突拍子もないことを言っているのは分かってるんだ!でも:再不斬の兄ちゃんを助けるにはこうするしかないんだ!」

ナ「そうだってばよ!俺は、再不斬の兄ちゃんと一緒に修行してみたんだってば!」ナルトとサトシがそう言ったら、カカシ先生が再不斬の方を向きこう問うた。

カカ「つって言っているんだが、桃地再不斬:お前は どうする?」

再「そのガキ共の言ってる事が意味わからん。俺はそのじいさんを殺すだけだ」やっぱりか:とカカシは深く息を吐いた

カカ「ナルトにサトシ交渉決裂だ。」

お前らは、タズナさんを守れ。」

「でも!!」

カカ「ま!任せとけて!」

サ「わかった。でも!」

カカ「大丈夫、殺さないよ」

さてとやりますかね。と言いながら、再不斬に向き直しカカシは額当てに手を当て上へとあげた。

再「ほう?…噂に聞く写輪眼を早速見れるとは光栄だな。
楽しくなりそうだ…忍法霧隠れの術…」

再不斬が使った忍術により、霧深くなり、少しずつ濃くなっていた

『8か所、喉頭・脊柱・肺・肝臓・頸静脈に鎖骨下動脈、腎臓・心臓…さてどの急所がいい?ククク…』

どこからともなく再不斬の声が聞こえてくる。

再不斬が次に姿を現すのは、タズナとナルト達3人の間だ。

カカ「ナルト、サトシ、カスミはこの先は知ってるが、他の3人は知らない、どうする!今は、サトシ達を信じよう。」

「「来た」」

「「え?」」

サ「サスケとサクラちゃん!!

タズナのおっちゃんを後ろへ!カスミ!タズナのおっちゃんを受け止めてそこに置いてくれ!ナルトは、再不斬の兄ちゃんが来た瞬間ガード!その後カシ先生の方に殴り飛ばせ!

「「え?あつ、うん(おう)!!」」

タズ「うおっ!」

カ「タズナさんごめんね〜」

タズ「いや、構わん」

再「なに!？」

ナ「あつぶねー、カカシ先生の方へ吹っ飛ばせ！そりや！」

再「くはっ!？」

再不斬が出るその前に気付いたサトシはサスケとサクラに支持を出しタズナを後ろへと移動させカスミが受け止めて、そこに置き、ナルトは再不斬が出てきた瞬間にガードをした後にナルトはカカシの方へと殴り飛ばした。

再「チツ、どうなってやがる、あのガキども！」

カカ「お前もよそ見は行けないよ」

再「なに!？」

カカシの方へと殴り飛ばされた再不斬は、着地をしたあとナルト達の方を見たその瞬間、

カカシが技を放なったが、それは再不斬へと直撃した、だがそこに居た再不斬は水分身だった。

カカシは再不斬に後ろを取られる。

しかし、コピー忍者と言う名はだてではない。コピーした水分身で再び再不斬の後ろ

へと立った。

お互い後ろの取り合いを何度かした後、体術による対戦へと入り、水の中に投げ飛ばされたカカシは水牢の術をくらってしまった。

再「ククク：ハマったな。脱出不可能の特製牢獄だ！お前に動かれるとやりにくいんでな。：さてとカカシお前との決着は後回しだ。まずはアイツらを片付けさせてもらうぜ。あのガキ共は許さねー」

カカ「やめた方が、いいと思うぞ。」

再「あんな餓鬼に、俺がやられるとでも？」

カカ「俺も、あいつらの実力は俺以上なのはわからない。

だが、あいつらの実力は俺以上なのはわかる」

再「あんなガキ共がそうには見えないがな」

カカ「俺が言ってるのは、黄色の髪色のやつと黒髪で顔に稲妻模様があるやつとオレンジ色の子だよ。」

再「フツ、そんなハツタリ俺に効く「油断すると、痛い目見るぞ？」なに!？」

再不斬がカカシの言葉に返事する前にナルトが再不斬の前に出ていた。

再「（このガキいつの間にも俺の前に!?!）」

サク「ナルトがなんであそこにいるの!?!」

サス「あの野郎!いつ行きやがった!」

サ「(あいつ…いつもは冷静なくせに何でこういう時はあーなんだからな)」

カ「(あんたもあんな感じよ)」

サ「(ええ…)」

などと再不斬が驚いた時に他は(一部を除いて)その行動に驚いていた

ナ「お前は自分の力に自信があるようだが、

その力だけじゃ、この世界は生きていけねんだよ…」

再「ガキ…何故そんな事を…知ってやがる、額当てまでして、忍者気取りか!だがな、本物の忍者っていうのはいくつもの死戦を乗り越えてきたやつのことを言うんだ。俺のビンゴブックに載るぐらいにな!」

ナ「気取り…俺は「ナルト…落ち着きなさいよ。

今は俺が相手してんだ。」

いつの間にか水牢の術から出ていたカカシが何かを言おうとしていたナルトを遮り、ナルトに言っていた

再「なに!?!いつ抜け出した!?!」

カカ「お前がナルトの相手をしていた間にだ。」

サ「(あの数分でかよ!?!流石、6代目火影だな)」

カカ「お前はここで死ぬ」

再「くっ…この…」

シュー…ザシユザシユ！

再不斬が言おうとした瞬間、千本が横から来て再不斬に刺さったすると…

「フフ…ほんとだ。ほんとに死んじゃった…」

再不斬の首を貫いたもの…それを放ったと思われるお面を被った少年が静かに木の上に姿を現した。

すかさず、カカシは倒れた再不斬の元に駆け寄りその生死を確認する。

——間違いなく、死んでいるようだ。

「ありがとうございます。ボクはずっと…確実に再不斬を殺す機会をうかがっていた者です。」

お面の少年は頭を下げ自分の身を明らかにする。

カカ「確か、その面……お前は霧隠れの追い忍だな……」

「さすが……よく知っていらつしやる。」

サク「追い忍？」

恐る恐るサクラが聞き慣れない単語を聞き返した。

「そう、ボクは『抜け忍狩り』を任務とする霧隠れの追い忍部隊の者です。」

辺りに少々険悪な雰囲気の流れる。他里の忍との接触というのは実はちよつと危険だからだ。戦闘になりかねない。そして里同士の違いの原因の一つである。

サ「白……」

「……!? 何故僕の名を？」

サ「ああ……俺達はお前のことを知ってる……白……俺はお前の敵じゃねー、本来だったら再不斬の兄ちゃんとも戦いたくはなかったんだ。ただ……再不斬の兄ちゃん、全く話を聞いてくれねえからさ。結局戦っちゃったけど、頼む……俺たちの話を聞いてくれないか？」

どうしても、お前たちをガトーから救いたいんだ。」

サク「サトシ!? 何言ってるのよ! さっきから!」

サス「おい! ウストラトンカチ!」

サスケ、サクラは、サトシの行動の意味がわからずサトシの名を叫ぶだけだった。そして、霧隠れの追い忍…否…白は目の前にいる少年の目が、嘘をついてるようには見えなかった、

何よりその必死さが、ふっふっ伝わった

白「わかりました。話は聞きます。僕らのアジトまで来てください。」

白は、実に賢い青年（見た目は仮面で見えないが）だった、自身のアジトであればいざとなれば、動きやすいのだ。

サ「つて事で、カカシ先生付いてきて!」

カカ「ほんとにお前は…次から次へと、こっちは驚いてばかりだよ。」

サク「ちよつと! サト「まあまあ。サクラ、サトシを信じなさいつて!」カスミ!でも…」

サ「サクラちゃんの言いたいことはわかる。」

でも、今からするあいつらを守るためでもあるんだ。確かに俺らはタズナのおつちやんの護衛任務でここまで来た、でも俺らの真の目的はあいつらと会い、あいつらを木の

葉に連れて行くことになってる。」

サス「何故なんだ!」

サ「はあ、じゃあ分身に行かせるか」

ボン!

サ「じゃあ、頼むな」

影サト「おう!」

カカ「これって俺もなの?」

サ「早く!」

カカ「あー、はいはい!」

ボン!

影カカ「ちよ!待ってよじゃ行ってくる!」

カカ「あつ、うん、頑張ってるね。」

カカシは、影カカシが急いで、影サトシについて行くのを見て、

ごめんねと思っていた。

サ「じゃあ、俺が説明する

サス「わかった。」

サク「わかった!」

サトシの言葉に納得したのか、黙ったのだったそしてナルトがサトシに念話を送って
いた。

ナ「(全部バラすのか?)」

サ「(うん、まあな、7班には知っていてほしい。)」

カ「(でも、暗部の事は…)」

ナ「(そこはじじいが何とかしてくれんだろ)」

カ「(それもそうね)」

カカ「よし、ひとまずタズナさんの家へ向かうぞ！」

「「「「おう(はい)(わかった)」「「「「」

次回に続く

第15話サトシとナルトとカスミ達の真実

サトシ達は、タズナの家に着いていた。

家についたところでサトシに黙ってついてきた、サクラが叫んだ。

サク「サトシ！あれってなんだったの！まさかあの事をサスケくんやカカシ先生、タズナさんに言うの!？」

それにさっきのはなんだったの！ハアハア…」

と、マシンガントークをサクラは息切れながら、言いながら聞いてきた。

それをサトシは宥めながら。

サ「まあ、サクラ落ち着けて、さっきのは色々事情があったんだ。

それに、この前話さなかった事も話さないといけないんだ。

それにカカシ先生はもうこの事知ってるし、この先生も訳ありだし。」

と言った。この先生もこの世界のパラレルワールドの未来の先生の精神だからだ。

カカ「わけアリって、ひどい事言うね。」

サク「わ、訳ありって？」

カ「簡単に言うところの先生は、ここに出発する前の精神と今の精神は違うってこと。今の精神は、パラレルワールドの未来の先生」

サク「????」

サス「ど、どういう事だ？」

カカ「ま、そこはあんまり気にしなくていいよ。

難しいからね。」

「わ、わかった」

タズ「わしはわかったぞ。」

タズナは、今の説明でわかったようだ。

サスケとサクらは、カカシが気にしなくていいよ、言ったので、気にしないことにしたようだ

ナ「んでもって、話を戻すぞ？まずは、サスケとタズナのおつちゃんには、カカシやサクらに教えた事を教える。」

カカ「ちよ!?!一応俺先生なんだからさ！」

ナ「…六代目火影ともあるーもんが、雑魚相手に手え抜いたからだろ？」

カカ「いやいや、俺は、平行世界とはいえ、同じふうにしないとイケないと思ったか

ら「違かったらどうすんだよ？そつちの世界とこつちの世界の進み方が同じなわけねえ。だからこそ変えなくちやなんねーだろ？」ぐぬぬ」

ナルトが指摘したのは、最初の戦いであつさりぶつた切られて、変わり身の術で様子見というのを選んだことを、言っていた。

サス「ナルト？」

サク「な、何かキャラ、か、変わってない？」

それを聞いていた、サスケとサクラは戸惑っていた、それを見かねてサトシが声をかける。

サ「ナルト、サスケとサクラが戸惑ってる。

急に”戻んな”。

ナ「このキャラも相当疲れんだよ！「自分で考えたんだろ」それを言うな！」

サ「とまあ、このバカ「誰がバカだ」は「スルーしやがった」このキャラを”作つた”ってわけだ。

サクラには、この世界に俺達が来たことを伝えたが、ナルトや俺たちの所属しているある部隊までは伝えられなかった。」

サクラ「ある…：部隊？」

サ「タズナのおつちゃんも聞いたことあんだろ？木の葉の守護七神って暗部の部隊」

タズ「それくらいは知っておるが…まさかお主らは…」

サ「そ、俺らがその木の葉の守護七神のメンバーで名は白狐」

ナ「同じく、狐月」

カ「同じく、白夜♪」

霧囲気を醸し出して、3人は名乗った

サス「お前らがあの任務成功率100%で木の葉最強のメンバーだったのか…」

サク「…かつこいい」

カ「かつこいいって、あたしは女の子なのになあ。」

サク「カスミは綺麗よ。」

カ「ありがとう♪」

タズ「おぬしらが、あの最強に名高い、七神じやったのか…」

この田舎までもその噂は聞いておる。

任務の成功率は100%でほかの暗部が瀕死やピンチの時は必ず現れ助けるといふ

ナ「噂以上に、知ってね？」

タズ「これは、読者に向けての言葉じゃ！」

サ「いや、メタいつての！」

「(ハハハ)」

若干のメタ発言もあったが、さっきまでの、雰囲気が若干和やかになった。
そして、サトシは、こう言った。

サ「10日後すべての決着がつく。」